南朝正史西戎伝と『魏書』吐谷渾・高昌伝の訳注

小谷仲男
菅沼愛語

目次

訳者のまえがき……188
『晋書』巻九十七、西戎伝……191
『宋書』巻九十六、鮮卑吐谷渾伝……204
『南斉書』巻五十九、河南伝……211
『梁書』巻五十四、西北諸戎伝……215
『魏書』巻一〇一、吐谷渾伝、高昌伝……231

訳者のまえがき

今回は魏晋南北朝時代の正史西域伝をとりあげることにした。その主要史料である『魏書』西域伝は内田吟風による苦心の訳注がすでに完成しているので（内田吟風一九八〇）、それ以外の北朝系、南朝系の西域伝相当の史料を訳注することにした。前回までに訳注した『新唐書』西域伝、『隋書』西域伝、『周書』異域伝には、吐谷渾、高昌伝が「西域伝」のなかに加えられていた。しかし現行の『魏書』西域伝（巻一〇二）にはなぜか吐谷渾、高昌伝は含まれず、別の巻一〇一に収められ、その結果、内田吟風の西域伝訳注からはずれてしまった。今回、私たちはこの二伝を訳注して、内田吟風訳の西域伝を補うことにした。とはいえ、現行『魏書』吐谷渾伝、高昌伝もその西域伝と同じく、宋初にすでに散逸してしまっており、治平四年～熙寧三年（一〇六七～一〇七〇）に、宋代の歴史家たちによって『北史』などから抽出して復元されたものである。その復元が当を得たものであったかどうか吟味する必要があり、内田吟風が西域伝訳注のさいに苦心した点もそこにあった。

『魏書』吐谷渾伝を翻訳して気づいたことは、その冒頭部分（東晋時代）が南朝『宋書』吐谷渾伝の敷き写しであることである。これは『魏書』吐谷渾伝の原本ではありえない現象である。『南史』巻七九河南（吐谷渾）伝を見ると、「事詳北史（北史に詳述）」とあり、南朝系の吐谷渾史料を大幅に削って『北史』にまわしたと記す。北史と南史の編纂は並行して進められ、ともに顕慶四年（六五九）に完成しているので、重複を避けるための措置であったと考えられる。中国が統一された唐代では、さほど南北史料の系統にこだわる必要がなかったのであろう。そのようにしてできあがった『北史』から機械的に吐谷渾伝を抽出し『魏書』吐谷渾伝を復元したのが、現行本である。なぜ『晋書』からではなく、『宋書』であったかという点は、『宋書』が沈約によって南斉の永明六年（四八八）と比較的早くに完成しているの

に対して、『晋書』の完成年が貞観一八年（六四四）と遅く、参照できなかったのであろう。一方、魏収による『魏書』の編纂は北斉の天保二年～五年（五五一～五五四）であり、まだ南北両朝の対立の激しい中で、『魏書』吐谷渾伝の原本に南朝の史料がまぎれ込むことは考えられず、上のような事情を考えると、吐谷渾伝のみならず、西域伝、高昌伝についても、現行本の利用には注意すべきことがらである。

中国の南北分裂時代にあって、揚子江南岸の建康（江蘇省南京）に首都を置く南朝（宋・斉・梁・陳）にとって、西域と交流することは北朝とくらべ地理的に不利であることは否めない。事実、南朝の正史西戎伝、異域伝の内容は北魏の西域伝にくらべ貧弱である。ただ例外的に吐谷渾（南朝は「河南」と呼称）については北朝に劣らず、内容が詳しい。

吐谷渾の出自は鮮卑系の慕容部（東モンゴル族）であったが、吐谷渾の一派が慕容氏本体から分離し、永嘉の乱（三〇七～三一三年）のさいに、隴山を西に越え、甘粛、青海省の黄河上流域に落ち着いた。吐谷渾は本来遊牧民であったが、土着の羌族を多く征服、吸収し、勢力を拡大したとおもわれる。従来、中国内地と西域を結ぶ幹線道路のひとつは祁連山脈の北麓に沿う河西回廊であったが、北魏と蠕蠕（柔然）との間で争奪の対象となり、危険が増したため、吐谷渾の支配する青海湖とツァイダム盆地がバイパスとして利用されるようになった。北魏の朝廷から派遣された宋雲、恵生は神亀元年（五一八）に洛陽を出発して、四〇日行程の後、黄河との分水嶺である赤嶺をこえて、青海の西方に所在した吐谷渾城を経て、ツァイダム盆地の砂漠を渡り、鄯善国（ミーラン付近）に出た。その後、西域南道のホータン、タシュクルガンをへてパミールを越え、まずはアフガニスタン北部の遊牧民族エフタルを訪ね、国王に面会し、魏皇帝の詔書を手渡した。ついでヒンドゥクシュの南の仏教国ガンダーラの巡礼をはたし、正光二年（五二一）に帰国した。当時は吐谷渾王の伏連籌の治世（五〇四～五二九）であり、鄯善国には王の次男が派遣され、統治していたという（今城主、是土谷渾第二息西寧将軍、総部落三千、以禦西胡。『洛陽伽藍記』巻五、「宋雲行記」）。吐谷渾政権がもっとも安

定し、繁栄した時期であった。

吐谷渾が重要な役割を担ったのは、北魏よりもむしろ南朝に対してであったとおもわれる。南朝の宋・斉・梁・陳は吐谷渾を仲介することによってのみ西域との交流が可能であった。南朝正史に吐谷渾が重視されるのもそのためである。さらに具体的な例証として『梁職貢図』を挙げることができる。梁・武帝（位五〇二～五二七年）の第七子の蕭繹（後の元帝）は揚子江中流の都市江陵の刺史として赴任している時、梁朝へ朝貢に訪れる外国使者の容貌を自ら写生し、そのさいに見聞したその国の地理・風俗を文章にして書き加え、武帝の統治第四〇年の盛況を記念して武帝に献上した（五四一年ころ）。西域からの使節だけでなく、首都へ集まる東夷、南蛮の朝貢使についても、蕭繹は別に人を派遣して資料を収集させたといい、約三〇余国の朝貢使節を描いた巻子本図録ができあがった（長さ四メートル、高さ二七センチ）。ただ、原本は早くに散逸し、北宋摸本（一〇七七年）が中国国家博物館（元南京博物院蔵）に現存する。ほかに二種の摸本が台湾故宮博物院に所蔵されるが、摸写の精度は劣り、史料価値は少ない。

かつて榎一雄はエフタル民族の資料としてこの『梁職貢図』を研究し、『梁書』西戎伝の記事の大部分はそれに基づくものであることを明らかにした。また倭人・百済らの使節図が含まれていることから、日本、朝鮮古代史の研究者たちも大きな関心を寄せた。しかし現状では一二図、一三題記（説明）しか残っておらず、約半分が失われた状態であった。ところが、最近、思わぬ発見が中国から報告された。乾隆四年（一七三九）、北宋模本が一時民間に流布している間、張庚という書画家が知人宅でそれを見て、素晴らしさに感激し、それを摸写し、題記を書き写した（以下、「張庚摸本」と記す）。その時の観察記と一八国の題記が『愛日吟廬書画続録』に収録されていることに、趙燦鵬が最近気づいたのである。そのうち七国の題記ははじめて知られるものであった。『梁書』西戎伝に関わるものは、渇槃陀、武興、高昌、于闐の四国の題記である。詳しくは趙燦鵬の論文（『文史』二〇一一年、第一輯）を参照されたい。幸いなこと

に、私たちも翻訳中にその報告を知り、早速活用することができた。

今回の訳注に当たって私たちが使用したテキストは前回と同様に中華書局出版の標点本である。そのほか『歴代各族伝記会編』第二編上、下冊、中華書局出版一九五八～九年を随時参照した。

『晋書』巻九十七、西戎伝

1　吐谷渾（とよくこん）
2　焉耆（カラシャール）
3　亀茲（クチャ）
4　大宛（フェルガナ）
5　康居（サマルカンド）
6　大秦（ローマ）

吐谷渾（とよくこん）

吐谷渾は、慕容廆の庶出の長兄であった。父親の渉帰は部落を分け、千七百家を吐谷渾に属させた。渉帰が死に、慕容廆が王位を継承すると、吐谷渾と慕容廆の二部の馬が闘った。慕容廆は怒り、「先王は、兄上のために部落を分けて、別の部落を建てて下さった。だのに、なぜ遠くに離れて暮らさず、馬同士を闘わせるのか」と言った。吐谷渾は、「馬は畜生にすぎない。馬にとって、闘うことは普通のことである。なぜ人間を怒るのか。そむき別れることは非常に容易である。私は、おまえのもとを去って万里の外に行こう」と言い、言葉のとおりに遂行した。慕容廆は後悔し、長史の

史那楼馮や父の代からの古老達を派遣して吐谷渾を追わせ、帰還させようとした。吐谷渾は「先王は、占いのことばを引用し、『二人の子は充分に繁栄し、幸いは子孫にも及ぶであろう』と言われた。私は卑しい庶子であり、道理として二人が並んで盛大となることはありえない。いま、馬が原因で我々兄弟が別れることになったのは、天の啓示するところであろう。諸君はためしに馬を駆り、東に向かわせてくれ。もし馬が東に帰ったら、私も馬に従って戻ろう」と言った。史那楼馮は、二千騎の従者に馬を率いさせ、東に向かって数百歩行かせたが、馬はすぐに悲鳴をあげると西に向かって走り出した。このようになることが十回ほどあった。楼馮は跪くと「これは人事のなせるわざではありません」と言い、馬を東に向かわせることをやめた。鮮卑では、兄のことを阿干といった。慕容廆は吐谷渾のことを追想して「阿干の歌」をつくり、年末になると思いつめて常にこれを歌った。

吐谷渾は自分の部落の民に言った。「我々兄弟は、ともに国を継承した。慕容廆と、彼の曾孫、玄孫は、わずかに百餘年だけ国を保持できるだろう。われわれは玄孫以後になってから繁栄を遂げるだろう。」　それから西に移り、陰山に達した。永嘉の乱（三〇七～三一三）に及び、吐谷渾は初めて隴山をわたって西へ至り、その後、子孫が西零より西にある甘松の境界を領有し、白蘭に至るまで数千里に達した。そして城郭を築いたが、そこには住まず、水と草を追い求めてテントを住まいとし、肉や酪を食糧とした。官職は、長史、司馬、将軍があり、よく文字を知っていた。男性は長裙（長いズボン）を着用し、帽子あるいは纂蘿（べきら）を頭にかぶった。婦人は金の花を首飾りとし、辮髪をうしろにめぐらして、珠貝をつないだ。婚姻は、富裕な家が嫁入りのための持参金をたくさん出し、貧しいものは（『周書』吐谷渾伝より補う）、花嫁を盗んでいった。父親が亡くなると、母親（群母）を妻とし、兄が亡くなると兄嫁を妻とした。葬制は、葬式が終わると喪の期間も終了した。国には常税がなく、国費に不足があると、そのつど富豪や商人から徴収し、足りない分を充たせば課税をやめた。殺人と馬泥棒は死罪、それ以外の罪を犯したものからは物を徴収し

て罪を贖わせた。その地では大麦がよく取れ、カブラが多く、マメと粟がやや多かった。蜀馬と犛牛を産出した。西北の種族たちは吐谷渾を「阿柴虜」といい、あるいは「野虜」と号した。吐谷渾は七十二歳で死去し、六十人の息子がいた。長男を吐延といい、彼が後を継いだ（三一七年、『資治通鑑』巻九〇、建武元年条）。

吐延は身長が七尺八寸で、その勇姿は魁偉豪傑で、羌族はこの男を憚り恐れて項羽と呼んだ。吐延の性格は才気が高く優れていて、群をぬいていた。かつて慷慨して部下に言った。「大丈夫は、生まれが中国でなくとも、前漢の高祖や後漢の光武帝の世にあれば、韓信、彭越、呉漢、鄧禹[1]と共に中原を駆けめぐり、天下に雌雄を決し、名を歴史に残すものを。しかし、深い山奥に逼塞して上京に礼教を聞かず、天府に名をしるすことができない。生きている時はトナカイ（もしくは大鹿）や鹿とともに群れ、死んだら氈裘（毛織の皮衣）の鬼となる。目先の安逸を貪っているとはいえ、どうして心に恥じずにいられようか。」

吐延の性格は残忍で、才智におぼれ、下のものに対して気を配れなかった。このため羌の族長の姜聡に刺された。剣がまだ体の中にある時、吐延は部将の紇拔泥に言った。「小僧が私を刺したのは、私の手落ちだ。上は先王に顔向けができず、下は仲間たち（士女）にはずかしい。すべての羌族を制御できたのは私がいたからだ。私の死後、よく葉延を助け、すみやかに白蘭を保有するのだ。」吐延は言い終えると死んだ。吐延の在位は十三年、息子は十二人おり、長男の葉延が後を継いだ（三二九年、『資治通鑑』巻九四）。

葉延が十歳の時、父の吐延は羌の族長姜聡に殺された。葉延は毎朝、草を縛って姜聡の像をつくり、泣きながらこれを射た。姜聡の像に矢が命中すると号泣し、矢が当たらないと目を怒らして大声で叫んだ。母親が、「姜聡は諸将がすでに殺してなますにしました。おまえはどうしてこんな風に泣くのか？」と言うと、葉延は泣きながら「草の像を射ても父上の復讐にならないことは、よくわかっています。私はこうすることによって、私の父に対する限りない思いを表

しているだけなのです」と言った。葉延は非常に親孝行で、母親が病で五日間食事をしなかった時には、葉延も食事をしなかった。

葉延は成長すると、沈着で剛毅な性格になり、天地の造化や帝王の年暦について好んで質問した。司馬の薄洛鄰は、「臣らは学ばなかったので、三皇がどのような父親の子であるか、五帝がどんな母親から生まれたのか、じつは詳しく知りません」と言った。葉延は「伏羲より以後、めでたいしるしや天象は、明らかに語られ、著しく見えている。しかし、そなたたちは土塀に向かって一歩も前進しない（『論語』陽貨）。なんと鄙びたことか。『荘子』（秋水）は、夏虫は冬の氷を知らない（知見が狭いこと）と言っている。なんと虚しいことか」と言った。葉延はまた、「『礼記』には、公孫の子は王の父の字を氏となすと言われている。[2] 私の始祖は昌黎（遼東地名）より出て、この地に建国した。いま吐谷渾を氏となすことは、祖先を尊ぶ意味である」と言った。葉延は在位二十三年、三十三歳で死去した。息子が四人おり、長男の辟〔碎〕奚が後を継いだ（三五一年、『資治通鑑』巻九九）。

辟奚の性格は仁義にあつく慈悲深かった。前秦の苻堅（三五七～八五）が勢い盛んである事を聞くと、使者を派遣して馬五十匹と金銀五百斤を献上した。苻堅は大いに喜び、辟奚を安遠将軍に任命した。辟奚の三人の弟はみな専横であったため、長史の鐘悪地は、弟達が国の災いになることを恐れて、司馬の乞宿雲に言った。「むかし鄭の荘公や秦の昭王が一人の弟を寵愛したために、宗廟がどれほど傾いたことか。ましてや、いま三人の庶子（三つの災い）はみな驕り高ぶっている。きっと社稷の災いになろう。私とあなたは、かたじけなくも王を補佐する元輔の位にある。もし五体満足で死んだなら、先王に問われた時、私はいったい何と言って先王に謝罪すればよいのか（『春秋左氏伝』隠公三年）。私がいま三弟を誅殺する。」これに対し、乞宿雲は、辟奚に申し上げようと請願したが、鐘悪地は、「わが王は決断力がない。告げてはならない」と言った。そこで、群臣が王に謁見する機会をとらえて、とうとう三弟を捕らえて誅殺した

（三七一年、『資治通鑑』巻一〇三）。辟奚は自ら牀（ベッド）に身を投げ出して倒れたので、鐘悪地らは走りよって、これを助けて言った。「臣は昨晩、夢に先王を見ました。王は臣に告げて言われました。『三弟が謀反を企んでいる。なんじは、すみやかにこれをのぞけ』と。そこで臣は謹んで先王の命令を奉ったのです。」　辟奚はもともと友愛の情に篤かったので、恍惚として病気になってしまった。辟奚は、後継ぎの視連に「私の不幸は兄弟を殺したことにある。どうして冥土の父に顔をあわせられようか。国事の大小については、なんじが執り行え。私は余生をそなたに寄食して生きるだけである」と言い、憂悶のためにとうとう死んでしまった（三七六年）。辟奚の在位は二十五年で、年齢は四十二歳であった。六人の息子がおり、視連が後を継いだ。

視連は即位すると、西秦の乞伏乾帰（三八八～四一二）と通好し、白蘭王を拝した。視連は幼い頃から廉直で慎み深く、志を持っていたが、父親が憂悶して亡くなったため、その後、政治をかえりみず、飲酒も狩猟もしないまま七年間を過ごした。鐘悪地は進んで言った。「そもそも君主というものは徳によって世を治め、威光によって人々を救い、五味によって民を養い、音楽と色事によって民を楽しませるものです。この四つのものは、聖天子や明王が優先するものです。しかし、公はみなこれらを無視されました。むかし、昭公は慎ましい倹約家でしたが身を滅ぼし、徐の偃王は仁義に篤い王でしたが、やはりその身は滅びました。つまり、仁義は身を保つもとでもありますが、同時に身を滅ぼすもとでもあるのです。国を統治する大綱は礼徳であり、世を救うものは刑法なのです。この二者に差異が生ずれば、国家の大綱は根本から崩れます。明君は代々相次いで徳を輝かし、幸いにも河西の土地（西夏）にわれわれの本拠を置くことができました。仁と孝は自然より発するものですが、それでもなお周公や孔子にのっとるべきであり、徐の偃王の仁に倣って、刑徳を捨て去るようなことがあってはなりません。」視連は泣いて言った。「先王は兄弟の痛みをいつまでも追い、悲憤のあまり崩御された。私は先王の仕事を継承したといっても、屍が残っているだけである。声色（音楽と色

事）、遊びと娯楽に、どうして安んじておれようか。国家統治と刑礼のことについては、私の子孫に託したい（綱維刑礼、付之将来）。」視連は臨終にあたり、息子の視羆に、「私の高祖の吐谷渾公は常に、子孫はきっと繁栄し、長く中国の西の藩屏となって、幸いは百世代にわたって流れ込むであろうと予言していた。しかし、私はもう及ばないし、おまえもまた見ることはできない。おまえの子孫達の時代に、きっと吐谷渾は栄えるにちがいない」と言い、在位十五年で亡くなった。視連には二人の息子がおり、長男を視羆、次男を烏紇堤といった（三九〇年、『資治通鑑』巻一〇八、太元十五年九月条）。

視羆の性格は英邁果断で、雄略があり、かつて従容として博士の金城騫苞に言った。「易経（繫辞伝上）には『動静には恒常性があり、剛と柔が別れて立つことになった』という言葉がある。先王は仁によって政治をつかさどったが、威光と刑罰には任せなかった。そのため剛と柔とが分たれず、近隣の敵に軽んじられた。天下正義のためには私は譲歩しない（当仁不譲：出典『論語』衛霊公）。どうして手をこまねいて黙っておれようか。いま、馬に秣（まぐさ）を与え、武器を鋭利にして、中国と天下の覇を争ったら、先王たちはどう思うだろうか。」これに対し、騫苞は「大王のお言葉は、高い志のある世俗を超越した経略であり、秦隴の英雄豪傑も聞きたいと願っている言葉です」と言った。そこで、視羆は胸襟を開いて民を説得したので、民はこぞって視羆のもとに結集した。

西秦の乞伏乾帰は使者を派遣して、視羆に使持節、都督龍涸已西諸軍事、沙州牧、白蘭王を授けた。しかし、視羆はこれを受けず、乞伏乾帰の使者に告げた。「晋より以後、天下の統一はなくなり、奸雄は競って覇権を追い求め、劉淵や石虎は残虐に中国を乱し、前秦や前燕は中国に跋扈した。河南王（私）は要害の地を占め、義勇の将兵を糾合して、不忠者を懲らしめよう。どうして官制を私設し、王を僭称するような群凶と同類になろうか。私は五人の先祖が立てた優れた勲を受け継ぎ、控弦の兵士（弓を引く兵士）二万を有している。今まさに秦・隴の地から災いを追い払い、沙州

や涼州を清め、その後、涇水や渭水で馬に水を飲ませ、天下簒奪の野心を持つ小者を殺戮して、土の塊で東関を封鎖し、前燕や後趙の進撃路を遮断して、天子を西京（長安）にお迎えし、遠方にある藩屏としての忠節を尽くそう。季孫氏と孟孫氏や子陽（後漢の公孫述）のように、みだりに自ら尊大になることがどうしてできようか。[3]（乞伏乾帰が）私のことを河南王と申すなら、どうして晋王室のために勲功を立てずに王府に名をしるし、当代に功績を建て、後世に名を残そうとしないのか。」乞伏乾帰は激怒したが、吐谷渾の強さを恐れて初めのうちは友好関係を結んだ。しかし、後に軍隊を派遣して吐谷渾を攻撃したので、視羆は大敗し、退却して白蘭を保った。視羆は、在位十一年にして三十三歳で死去した。息子の樹洛干は幼かったので、王位は烏紇堤に継承された（四〇〇年、『資治通鑑』巻一一一）。

烏紇堤は、またの名を大孩といい、性格は懦弱で、酒色に耽り、国政を顧みなかった。乞伏乾帰が長安に入城すると、烏紇堤はしばしば国境地帯を略奪した。乞伏乾帰は怒り、騎兵を率いて吐谷渾を討った。烏紇堤は大敗し、一万餘人を喪失した。烏紇堤は南涼を保ち、胡国〔胡園〕で死去した。烏紇堤の在位は八年で、亡くなった時には三十五歳であった。その後、視羆の息子樹洛干が即位した（四〇五年、『資治通鑑』巻一一四）。

樹洛干は、九歳で父を亡くし孤児となった。母親の念氏は聡明でやさしく美しかったので、烏紇堤はこれを妻とし、寵愛して、国政を壟断した。樹洛干は、十歳になると自ら世継ぎを称し、十六歳で王位を継承し、総べるところの数千家を率いて莫何川に帰還し、自ら大都督、車騎大将軍、大単于、吐谷渾王を称した。部落を教化したので、民は生業を楽しみ、樹洛干を号して戊寅可汗と称した。沙漠の種族は樹洛干に帰属しないものはいなかった。そこで樹洛干は宣言した。「私の先祖はこの地に避難し、私で七世代に及ぶ。多くの賢者とともに立派な仕事を楽しむことを考えてきた。いま、軍馬は勇敢で、控弦（弓を引く兵士）は数万いる。私は梁州や益州に威力をふるい、西戎に覇を唱え、軍隊を三秦で閲兵し、遠方の天子に朝貢しよう。諸君は、どう考えるか？」吐谷渾の民はみな「これは立派な徳でございます。

大王よ、どうかお励み下さい」と言った。

西秦の乞伏乾帰は、これを非常に疎ましく思い、騎兵二万を率いて樹洛干を赤水で攻撃した。樹洛干は大敗し、ついに乞伏乾帰に降伏した。乞伏乾帰は樹洛干に平狄将軍、赤水都護を授け、弟の吐護真を捕虜将軍、層城都尉とした。その後、樹洛干はしばしば乞伏熾磐（四一二～二八）に破れ、また白蘭に逃げて同地を保ったが、次第に憤懣がつのり、発病して死去した。樹洛干は在位九年、二十四歳で亡くなった（四一七年、『資治通鑑』巻一一八）。乞伏熾磐は、樹洛干の死去を聞くと喜んで言った。「この夷狄は強く勇ましかった。樹洛干は、詩経（小雅、漸漸之石）に歌われているところの『白い蹄の豚』であった。」樹洛干には四人の息子がいた。世継ぎの拾虔が後を継いだ。その後、世継ぎは絶えなかった。[4]

注

（1）鄧禹は、後漢光武帝とは若い頃から親交があった。後漢建国の功臣。

（2）『資治通鑑』巻九四、咸和四年、吐谷渾王の葉延の記事に対する胡三省の注は、「以王父之字為氏」の出典を『礼記』ではなく、『春秋左氏伝』の次のような記事をあげる。『左伝』魯衆仲曰、「天子建徳、因生以賜姓、胙之土而命之氏。諸侯以字。」杜預註曰「諸侯之子称公子、公子之子称公孫、公孫之子以王父字為氏。」

（3）季孫と孟孫は春秋時代の魯国の三家老の二者で、国の政治を左右した。かつて斉の君主が孔子を政治顧問として、季孫と孟孫の間の待遇で迎えたいといったことは有名な話（『論語』子微）。子陽は後漢の公孫述の字。王莽の時代に成都を占領して驕り高ぶった。馬援の使者が公孫述に面会して、「かれは井の中の蛙」に過ぎないと報告したという（『後漢書』巻二四馬援伝）。

（4）【吐谷渾王の系図（晋代まで）】

吐谷渾――吐延――葉延――辟奚――視連――視羆――樹洛干――拾虔
　　└烏紇堤

焉耆（カラシャール）

焉耆国は、洛陽の西八千二百里にある。その地の南は尉犂（コルラ）、北は烏孫と隣接し、国土は四百里四方の広さであった。四方には大きな山があり、道は険阻狭隘で、百人がこれを守備すれば、千人の敵兵でもここを通過することはできなかった。その国の風俗では、男子は髪を切りそろえ、婦人は襦を着用し、大きな袴をはく。婚姻は中国と同じである。貨物財利に貪欲であり、姦計や詭計を用いる。王は侍衛の兵士を数十人はべらせているが、兵士はみな傲慢で、尊卑の礼に欠けている。

武帝の太康年間中（二八〇～二八九）に、国王の龍安が息子を朝廷に派遣して入侍させた。龍安の夫人は獪胡の女性であったが、妊娠十二ヵ月後に、わき腹を切開して子を産んだ。子の名を會といい、龍安はこの子を世継ぎに立てた。會は幼いときから、勇気があった。龍安は病で危篤状態になると會に言った。「わたしは昔、亀茲（クチャ）王の白山から辱めを受けた。その事は心に忘れない。この恥を雪ぐことができれば、おまえはわたしの息子である」と。會は即位すると、亀茲王白山を襲撃して滅ぼし、自分は亀茲国に止まった。息子の熙を本国（焉耆）に帰国させ、焉耆の王にした。會は肝っ玉が太くて計略があり、西方の胡人たちをおさえ、葱嶺（パミール）以東の諸国で會に服従しない国はなかった。しかし會には武勇を恃んで軽率なところがあり、かつて野外で宿営した時、亀茲国人の羅雲に殺された。

その後、前涼の張駿が沙州刺史の楊宣に軍勢を率いて派遣し、西域を統治しようとし、楊宣は部将の張植を先鋒とし、向かうところを風靡した。前涼の軍勢が焉耆に駐屯すると、熙は賁崙城で敵軍を阻止して戦ったが、張植に敗北した。

張植は進軍して鉄門に駐屯しようとした。鉄門まであと十餘里というとき、熙もまた軍勢を率いて先回りし、遮留谷で張植を待ち伏せた。張植がちょうど遮留谷に到達しようとしたとき、あるものが言った。「漢の高祖は柏人で宿泊することを恐れてこれを避け、後漢の岑彭は彭亡に陣を築いて死にました[1]。いま、谷の名前は遮留（さえぎり留める）といい、いかにも不吉です。伏兵がいるのではないでしょうか。」張植が単騎で遮留谷をさぐると、果たして熙の伏兵が出撃してきた。張植は軍勢を出動させて熙の軍を打ち破り、さらに進撃して尉犂を占領した。熙は配下の四万の兵を率い、肌ぬぎになって、半身を裸にし（肉袒）、楊宣に降伏した。

そののち、前秦将軍の呂光が西域を討伐したとき、熙もまた呂光に降伏した（三八三年）。呂光が王位を僭称すると、熙もまた呂光のもとに息子を入侍させた。

注

（1）漢の高祖劉邦は、あるとき河北省の柏人で宿泊しようとしたが、柏人では貫高が劉邦暗殺を企てていた。このとき劉邦は「柏人＝人に迫る」という言葉を不吉に思い、柏人での宿泊を取りやめた（『史記』巻八九張耳伝）。後漢の岑彭は彭亡で陣地を築いたとき、「彭亡＝彭を亡ぼす」という言葉を不吉だと思ったが、そのまま彭亡に留まり、刺客に殺された（『後漢書』巻一七岑彭伝）。

亀茲（クチャ）

亀茲は、洛陽の西、八千二百八十里のところにあった。その国の風俗として、人びとは城郭に居住する。城は三重の城壁を持ち、城壁の中に仏塔や廟が千箇所あった。人々は農業と牧畜をなりわいとし、男女はみな前髪を切り、うしろ髪を項（うなじ）に垂らしていた。王宮は壮麗で、光り輝くさまは、さながら神殿のようであった。

武帝の太康年間中（二八〇～二八九）に、亀茲王は子供を入侍させた。恵帝・懐帝の末（三一〇年頃）、中国が混乱したため、亀茲は前涼王の張重華（三四六～五三）のもとに使者を派遣し、特産物を献上した。前秦の苻堅のとき、将軍の呂光に七万の軍勢を率いさせて討伐させたが、亀茲王の白純は国境で呂光を阻止し、降伏しなかった。しかし、呂光は軍を進め、亀茲を平定した。[1]

注

（1）呂光の西域遠征については、『晋書』巻一二二「呂光伝」に詳細な記載がある。また『資治通鑑』巻一〇四～一〇六にも同様な記事が、年月ごとに分かれて採録されている。それによると、前秦王の苻堅は華北を統一した後、西域支配を意図して、驍騎将軍の呂光に総兵七万、鉄騎五千を率いさせ、鄯善王および車師前部（トルファン）王を道案内にして西域（焉耆、亀茲）遠征に向かわせた（三八三年正月、長安出発）。なお、『晋書』巻九五「鳩摩羅什伝」によれば、苻堅は呂光に対して「もし亀茲（クチャ）において鳩摩羅什を手に入れたならば、直ちに駅馬を馳せて送りとどけよ（若獲羅什、即馳駅送之）」と命じている。西域の名僧、鳩摩羅什の獲得も、遠征の重要な目的のひとつであった。呂光は敦煌から沙漠を渡り、三八三年十二月には、焉耆（カラシャール）を攻撃し、降伏させている。亀茲国王の白（帛）純は激しく抵抗し、周辺諸国に救援を求めた。亀茲の西にいた遊牧民族の獪胡が騎馬兵二十余万を、温宿、尉頭諸国らは七十余万の兵を派遣して亀茲を救援した。数の上で劣勢に立った呂光は密集戦法（勾鎖之法）をとって、敵陣の一角を突破することに成功した。白純は城を棄てて出奔し、亀茲城は陥落した（三八四年七月）。呂光は城内に入って目を見張った。その宮殿の壮麗さは、長安に引けを取らなかった。亀茲国の豊かさに魅せられ、呂光はそこに居座ることを考えたが、鳩摩羅什から「ここは留まるべきところではない」と諭され、帰途についた。しかしその途上、苻堅が後秦王の姚萇によって殺害されたことを聞き（三八五年八月）、姑蔵（武威）にとどまり、独立した。三九六年には、自ら天王を名

のって、大涼（後涼）を建国した。呂光は間もなく病没した（三九九年）。鳩摩羅什は呂光父子に拘束されたまま、長年、姑蔵に留められたが、四〇一年になって、後秦王の姚興が後涼王呂隆を降伏させ、鳩摩羅什を長安に迎え入れた（『出三蔵記集』巻十四、『高僧伝』巻二、鳩摩羅什伝）。

大宛（フェルガナ）

大宛は、洛陽の西一万三千三百五十里にあり、南は大月氏（クシャン朝）に至り、北は康居（サマルカンド）と隣接していた。大小の城が七十あまりある。その土地は稲と麦の栽培に適し、ブドウ酒をつくる。良馬が多く、馬は血の汗を流して走る。その国の人々はみな、彫りの深い顔立ちで、あご髭が濃い。その国の風俗では、妻を娶る時、最初に金製の婚約指輪を贈り、その後に結婚する。また、三人の婢（下女）に試し、その男に性的能力がないとわかれば、婚約は破棄される。姦通して生まれた子供は、その母親が卑しまれる。乗馬する場合、人と馬との相性が合わず、乗り手が落馬して死んだときは、その馬の持ち主が葬儀の棺を用意する。国人は商売が巧みで、わずかな利益をも争う。中国から金銀を入手すると、すぐに器物につくりかえ、貨幣をつくることはなかった。

太康六年（二八五）、武帝は楊顥を大宛に派遣し、王の藍庾を大宛王に任命した。藍庾が死没すると、息子の摩之が即位し、使者を派遣して汗血馬を献上した。

康居（サマルカンド）

康居は大宛の西北およそ二千里のところにあり、粟弋（ソグド）、伊列と隣接する。王は蘇薤城に住む。風俗、人の容貌、衣服は大宛と同じである。その土地は温暖で、桐・柳・葡萄が多く育ち、牛と羊が多く、良馬を産出する。泰始

年間中（二六五～二七四）、王の那鼻が使者を派遣し、天子に封事（密封した書簡）を奉り、あわせて駿馬を献上した。

大秦（ローマ）

大秦は[1]、またの名を犂鞬といい、西海（インド洋・地中海）の西にある。その地は東西南北がそれぞれ数千里であった。都城があり、その城の周囲はおよそ百里であった。家屋はみな珊瑚でうだつがつくられ、瑠璃で壁がつくられ、水精で柱の基礎がつくられていた。王は五つの宮殿を有し、宮殿はそれぞれ互いに十里ずつ離れていた。毎朝、一つの宮殿で訴訟を聞き、終わるとまた次の宮殿に移る。もし国に災厄や異変があると、すぐに賢人を擁立して、それまでの王を放逐したが、放逐された旧王もまた、これを決して恨まなかった。役所には帳簿があり、文字は胡書と同じ。また白蓋の小車、旌旗のたぐい、郵便駅伝制は、まったく中国と同じである。この国の人々は長身で大きく、容貌は中国人に似るが、胡服を着用する。その国は、金や玉の宝物、明珠、大貝を多く産出し、夜光璧、駭鷄犀、火浣布がある。また、金縷（金糸）で刺繡を刺し、錦縷（錦の糸）で罽（毛織の敷物）を織る。金や銀で貨幣をつくり、銀銭は金銭の十分の一に相当する。安息（パルティア）や天竺（インド）の人と海の中で交易し、百倍の利益をあげる。隣国の使者が到来すると、すぐに金銭を支給する。大秦に至るには途中、大海を渡らねばならず、海水は塩からく、にがくて飲むことはできない。客商たちは往来に三年分の食糧を携えねばならないので、往来する者は少ない。

漢代に、西域都護の班超が部下の甘英を大秦国（ローマ）へ派遣したことがあったが、甘英が船に乗ろうとした時、船頭が告げた。「海には魅惑するものがおり、人はみなホームシックにかかる。漢の使者よ、もしあなたが父母妻子になんの未練がないならば、どうぞお乗りください」と。甘英は海を渡るのをあきらめた。武帝の太康年間中（二八〇～二八九）、大秦王は使者を派遣して、朝貢してきた。

注

（1）この大秦伝の内容は、ほぼ『後漢書』巻八八西域伝、「大秦伝」にもとづき、甘英の旅行については「安息伝」から採用している。

『宋書』巻九十六、鮮卑吐谷渾伝

吐谷渾（とよくこん）

阿柴虜[1]の吐谷渾は遼東の鮮卑族である。父の弈洛韓には二人の息子があり、長男を吐谷渾、次男を若洛廆といった。若洛廆は別に慕容氏をなした。吐谷渾は妾腹の長男、若洛廆は嫡男であった。父親は在世中、七百戸を分けて吐谷渾に与えた。吐谷渾と若洛廆の二部落は、ともに馬を放牧していたが、馬が闘って互いに傷つけあったので、若洛廆は怒り、吐谷渾に手紙を送って言った。「先王は部落を処分して、兄上に異なる部落を与えられた。なぜ馬の放牧を遠くで行わず、馬同士が闘争して互いに傷つけあうような事態に至らせたのか？」吐谷渾はこれに対して言った。「馬は畜生にすぎない。馬は草を食べ、水を飲み、春の気配を感じて活動し、闘いに及んだのだ。闘いは馬の問題なのに、なぜ、その怒りが人に及ぶのか？　そむき別れることは非常にたやすい。いま、おまえのもとを去って、万里のかなたに移り住もう。」　吐谷渾はそこで馬を率いて西に向かい、一日に一頓進んだ。頓というのは八十里である。吐谷渾が数頓をへた頃に若洛廆は後悔し、ひどく自分を責めて、昔の父老や長史の乙那楼に吐谷渾を追わせ、吐谷渾を帰国させようとした。

しかし吐谷渾は、「我々は父祖以来、徳を遼右に立てていた。また占いの予言によれば、先王は二人の子を持ち、幸いはともに子孫に伝わるという。私は卑しい庶子であり、道理として二人が並び立って盛大となることはむずかしい。いま馬によって別れることになったのは、天の啓示するところであろう。諸君はためしに馬を率いて東に向かわせよ。もし馬が東に帰ったら、私はそれに従って東に戻ろう」と言った。乙那楼は喜んで拝礼し、「可汗の仰せにしたがいます（処可寒）」と言った。夷狄の「処可寒」という言葉は、宋の言葉では「爾官家」という意味である。乙那楼は自分が従えてきた二千騎で吐谷渾の馬の群れを遮り、方向転換させた。しかし三百歩も行かないうちに、馬はいなないて突然走り出した。その声は山を崩すような大声であった。このようなことを十数回試したが、いずれも馬はすぐに向きを変えて遠方に行ってしまった。乙那楼は根負けして、跪いて言った。「可寒（可汗）よ。これはもう人事のなせるわざではございません。」　吐谷渾はそこで部落の民に言った。「我々の兄弟や子孫は、ともに繁栄を享受できよう。若洛廆はきっと子供と曾孫・玄孫に、その繁栄を伝えるだろう。その間、百年あまり。私の場合は玄孫の代になって、栄え始めるだろう。」　以上のような理由で吐谷渾は西に移動し、陰山に到達した。吐谷渾は晋の混乱（永嘉の乱）に遭遇し、ついに隴山を越えることができた。この後、若洛廆は吐谷渾を追想して「阿干の歌」をつくった。鮮卑のことばでは、兄のことを「阿干」と呼んだ。若洛廆の子孫が帝王を僭称したとき、この歌を「輦後大曲」とした。

吐谷渾は隴山を越えると、罕幵と西零に出た。西零はいまの西平郡、罕幵はいまの枹罕縣である。枹罕より東の千餘里は甘松に及び、西は河南に至り、南は昴城、龍涸を境界とした。洮水の西南から白蘭にまで達する数千里以内で、水と草を追い求め、テントに暮らし、肉や乳製品を食糧として生活した。西北の諸族はこれを阿柴虜と呼んだ。

吐谷渾は七十二歳で死去し、六十人の息子をのこした。長男の吐延が後を継いだ。吐延は身長が七尺八寸あり、膂力は人よりも優れていて、性格は凶暴だった。昴城の羌の族長姜聡に殺された。吐延は、剣がまだ体内に刺さっている時

に息子の葉延を呼び、大将の絶抜渥に語って言った。「私が絶命したら、棺に遺体を納め、（葬儀が）終わったら、すぐに遠方に移動して白蘭を保て。白蘭の地は険阻で、またその住民は惰弱だから統御しやすい。葉延は幼いので、気持ちとしては他のものに王位を授けたいのだが、おそらく、この緊急事態ではとても統御することはできないだろう。いま、葉延をおまえに預ける。おまえは股肱の力を尽くしてこれを補佐しろ。この幼児が王位に就くことができれば、わしには何の恨みもない。」そう言うと吐延は剣を引きぬいて死んだ。吐延は位を継承して十三年、三十五歳であった。吐延には息子が十二人いた。

葉延は幼い頃から勇敢で、十歳の時、草を縛って人のかたちをつくり、これを姜聡と名づけて毎朝、これを的にして射た。矢が命中すると喜び、命中しないと大声で泣いた。母親が「賊への復讐は諸将がすでに行い、姜聡は殺されてなますにされました。おまえは幼いのに、なぜ毎朝、このように思い煩うのか」と言うと、葉延は嗚咽をこらえきれず母親にこたえて言った。「私もこれが無益なことはよく知っております。しかし心の奥底では（罔極之心）、私はこの痛みに耐えることができないのです。」葉延はとても親孝行で、母親が病気で三日間食事ができなかった時には、葉延もまた食事をしなかった。葉延は書伝をよく読み、曽祖父の弈洛韓が曹氏の魏王朝から初めて昌黎公に封じられたと考え、「私は公孫の子である。礼記によれば、公孫の子は父親の字を氏とすることができるのだ」と言って吐谷渾の名を氏姓とするよう命令した。位を継いでから二十三年、三十三歳で亡くなった。四人の息子がいた。

長男の碎〔辟〕奚が即位した。碎奚は性格が廉直で、三人の弟が専横であった。碎奚は制御することができなかったので、諸将がともに謀って三弟を誅殺した。碎奚は憂い悲しんで、二度と政務をとれなくなった。そこで息子の視連が立てられて世継ぎとなり、政治を任されて「莫賀郎」と呼ばれた。「莫賀」は宋の言葉で父を意味する。碎奚は憂いが高じて亡くなった。在位は二十五年、年齢は四十二歳であった。六人の息子がいた。息子の視連は父親が憂悶のために

亡くなったので、遊びや娯楽をたしなまず、酒宴も行わなかった。在位十五年、四十二歳で亡くなった。視連には息子が二人おり、長男が視羆、次男が烏紇提〔堤〕といった。視羆は王位を継承すること十一年で、四十二歳で亡くなった。息子の樹洛干たちはみな幼少であったので、弟の烏紇提が即位した。烏紇提は在位八年、三十五歳で死んだ。視羆の息子樹洛干が、烏紇提の後を継いで即位し、自ら車騎将軍を称した。義熙初年（四〇五年）のことである。

樹洛干が亡くなると、弟の阿犊〔豺〕は自ら驃騎将軍を称した。譙縱（後蜀）が蜀を乱した時、阿犊は従子の西彊公の吐谷渾敕来泥を派遣して領地を開拓させ、龍涸、平康に達した。少帝の景平年間中（四二三）、阿犊は宋に遣使して上表し、特産物を献上した。そこで、少帝は阿犊に勅書を下して言った。「吐谷渾の阿犊は辺境に介在しているが、義を慕うことは喜ぶべきことである。阿犊を寵任するのがよかろう。いま吐谷渾の来朝にむくい、（都）督塞表諸軍事、安西将軍、沙州刺史、澆河公を授けることを許可する。」宋朝から爵位を拝受しない間に、宋では太祖文帝が即位し、その元嘉三年（四二六）に文帝が再び勅書を下し、阿犊を官職に任命した。しかし勅書が届く前に阿犊は亡くなり、弟の慕瓚が即位した。

元嘉六年（四二九）、慕瓚は宋の文帝に上表して言った。「大宋は天の機運にあたり、四方の夷狄は宋王朝を心のよりどころに致しております。臣の亡兄阿犊は、宋王朝の義を慕い、宋朝に対する愛着の念は非常に強いものでした。昨年七月五日、謁者の董湛が至り、明詔を宣伝し、栄爵を授けてくれました。しかし臣は家族に不幸があり、兄が亡くなりました。臣は惰弱ですが、兄の遺業を受け継ぐことになりました。宋王朝の恩寵は、本来わが一族に対して与えられたものであり、もし任官を返上することになれば、宋王朝の信命が途絶えるのではないかと恐れます。臣は、宋王朝からの寵任を拝受し、陛下の思し召しを奉って従います。どうかよく考査のうえ、もう一度私宛に任命書をお授け下さいますよう伏してお願い申しあげます。」

元嘉七年（四三〇）、文帝は詔をして言った。「吐谷渾の慕璝兄弟は義を慕い、その至誠は喜ぶべきものである。慕璝に爵位を授けて、その忠誠心と愛情を教え導くのがよい。慕璝を、（都）督塞表諸軍事、征西将軍、沙州刺史、隴西公に任命することを許可する。」

これより以前の晋末、金城の東の允街縣の胡人乞伏乾帰（西秦王、三八五～四三一）が、部衆を率いて洮河と罕幵を占拠して自ら隴西公を号した。乾帰が亡くなると、息子の熾磐が即位し、晋に遣使して帰順した。晋は熾磐を使持節、都督河西諸軍事、平西将軍とした。隴西公の称号は、そのままであった。宋の高祖武帝が即位すると、熾磐の官職を進めて安西大将軍となした。熾磐が亡くなると、息子の茂蔓が即位した。慕璝がしばしば軍隊を派遣して茂蔓を攻撃したので、茂蔓は部落を率いて東に移動して隴右に走った。そこで慕璝は洮河を占拠した。この年、赫連定が長安で北魏（索虜）の太武帝（拓跋燾）に攻撃され、秦の戸口十餘万を率いて西に移動して罕幵に達した。赫連定は涼州に向かおうとしたが、慕璝がこれを迎撃し、大いに打ち破り、赫連定を生け捕りにした。北魏太武帝が、慕璝に使者を派遣して赫連定の身柄を求めてきたので、慕璝は定を太武帝に献上した。

元嘉九年（四三二）、慕璝は宋朝に司馬の趙敍を派遣して朝貢し、同時に、二万人の捕虜を献上すると言った。これに対し、太祖文帝は、褒美として慕璝の官職に使持節、散騎常侍、都督西秦・河・沙三州諸軍事、征西大将軍、西秦・河二州刺史、領護羌校尉を加え、爵位を隴西王に進めた。文帝はまた、弟の慕延を平東将軍、慕璝の兄樹洛干の息子拾寅を平北将軍、阿犭の息子煒代を鎮軍将軍となした。さらに文帝は慕璝に詔をくだし、南朝の将兵で、かつて赫連勃勃に捕まった者たちをみなことごとく宋へ送致させた。慕璝は朱昕之ら五十五戸、一五四人を宋に護送した。

慕璝が亡くなると、弟の慕延が即位し、宋に遣使して上表を奉った。元嘉十五年（四三八）、慕延を使持節、散騎常侍、都督西秦・河・沙三州諸軍事、鎮西大将軍、領護羌校尉、西秦・河二州刺史、隴西王に任命した。元嘉十六年

（四三九）、慕延を改めて河南王に封じた。その年、拾虔の弟の拾寅を平西将軍、慕延の庶出の長男繁暱を撫軍将軍、慕延の嫡子瑍を左将軍、河南王世子となした。元嘉十九年（四四二）、阿犭に対して生前に帯びていた称号、安西・秦・沙三州諸軍事、沙州刺史、領護羌校尉、隴西王を死者への官位として追贈した。北魏の太武帝（索虜の拓跋燾）は軍勢を派遣して慕延を撃ち、大いに打ち破ったので、慕延は部落を率いて西に移動し、白蘭に走り、于闐国（ホータン）を攻め破った。慕延は、北魏がまた到来することを恐れ、元嘉二十七年（四五〇）、宋に遣使して上表し、「もし吐谷渾が安定しない場合には、部落を率いて龍涸、越嶲に入りたいと思います」と言った。慕延はまた、文帝に牽車を要求し、烏丸帽、女国の金酒器、胡王の金の腕輪などを献上した。文帝は慕延に牽車を下賜し、もし北魏が到来して吐谷渾が自立できない時には、越嶲に入ることを許可した。しかし北魏は到来しなかった。

慕延が亡くなると、拾寅が自ら即位した。元嘉二十九年（四五二）、文帝は拾寅を使持節、（都）督西秦・河・沙三州諸軍事、安西将軍、領護羌校尉、西秦・河二州刺史、河南王に任命した。拾寅は東方において、北魏を打ち破ったので、文帝は拾寅に開府儀同三司を加えた。世祖孝武帝の大明五年（四六一）、拾寅は遣使して善舞馬と四角羊を献上した。皇太子、王公以下が、舞馬歌を献上し、その数は二十七首に達した。太宗明帝の泰始三年（四六七）、拾寅を征西大将軍に進めた。泰始五年（四六九）、拾寅は明帝に上表を奉り、特産品を献上した。そこで明帝は、弟の拾皮を平西将軍、金城公とした。前廃帝はまた、拾寅を車騎大将軍に進めた。

吐谷渾の国の西方には黄砂があり、その広さは南北百二十里、東西が七十里で、草木が生えない。沙州という名は、この黄砂に由来する。屈真川には塩地があり、甘谷嶺の北には雀鼠が同居するという穴があった。その穴は山嶺、あるいは平地に存在する。雀の色は白、鼠の色は黄色で、地面に黄紫色の草花が生えている場所に、雀鼠同穴がみられる。白蘭の地は黄金、銅、鉄を産出する。吐谷渾は水と草を求めて移動するが、たいていは慕賀川流域にその中心がある。

史臣がいう。吐谷渾は草地をもとめて移動し、泉池に水をもとめ、塞外の地で勢力を振るう。毛皮を衣とし、肉を食する。狩猟と牧畜とで生計を立て、錦組繒紈（絹製品）は珍貴、特別な品とみる。ただ、商人、通訳が往来するので、北面して天子に拝する礼儀は中国に同じである。昔から、明哲の王は遠方の人びとを懐柔する志があるというが、要服・荒服という遠隔の地は回避した。そこは礼儀、文化が及ばず、その王への班爵はせいぜい子爵にとどまった。そのことは『春秋』に記される。

晋と宋とは法典を制定し、古典に記された制度に則らず、ついに吐谷渾王に公の爵位（公侯伯子男の最上級）を授け、官位秩品は台光（三公）に等しくした。かれらは辮髪して朝廷に参賀し、簪冕を尊重せず、言語は通ぜず、どうしてかれらに天子の政治を敷きひろめることができようか。また吐谷渾から朝貢の品物を入れた包や篭が毎年朝廷に届くが、本心は交易が目的である。かれらが献上する金・罽・毛氈・毦（羽毛）は緊急の品ではない。使節の送迎は煩雑であり、得るものより、失うもののほうが多い。粛愼（東北の民族）を毎年朝貢させ、越裳（ヴェトナムの古代民族）を毎年饗応する類である。邪見を書きしるして、古典の記述を低めることはできない。聖人がかれらの地を荒服と見なしたことは、確かにそれなりの理由があったのである。

注

（1）阿柴虜の呼称について。吐谷渾をさげすんで「阿柴の虜」と呼ぶことは、『宋書』本伝のほか、『南斉書』河南伝の「（阿）貲虜」、『晋書』吐谷渾の「阿柴虜」「野虜」にも見える。北朝系史料の『魏書』、『北史』吐谷渾伝には「西北諸雑種謂之阿柴虜」とあるが、『晋書』と同文なので、『魏書』吐谷渾伝の原本に本来存在した文章であるかどうか疑問である。なお、「阿柴（アシャ）」の呼称は吐蕃（古代チベット王国）がもっぱら吐谷渾を呼ぶ名称として使用した。もう一つの問題として、「阿柴」の名称の由来が吐谷渾王の「阿豺（豺）」であるかどうか。阿豺（在位四一七～四二六年）は

吐谷渾の勢力を拡大し、宋朝から安西将軍、沙州刺史、澆河公の爵位称号を受けており、吐谷渾がその王名によって広く知られるようになった可能性はある。しかし確証はない。（清・丁謙「宋書夷貊伝地理考証」、Pelliot 1912：520-23, Pelliot 1921：321-25, Molé 1970：73-75, note 22, 佐藤長一九五八：二四八、二六四参照。）

『南斉書』巻五十九、河南伝

河南（吐谷渾〔とよくこん〕）

河南は、匈奴の種族である。後漢の建武年間中（二五～五六）に、匈奴の奴婢が涼州の境界に逃亡し隠れ住んだ。その数は雑多種族の数千人であった。匈奴は奴婢を貲と名づけ、また「貲虜」とも呼んだ（『魏略』西戎伝）[1]。鮮卑の慕容廆の妾腹の兄吐谷渾は、氐族の王となった。吐谷渾は、益州の西北、数千里にわたる地に住んだ。その南の境界の龍涸城は、成都を去ること千餘里であった。大きな駐屯地が四つあり、一つは清水川、一つは赤水、一つは澆河、一つは吐屈真川にあり、みな王族の子弟がこれを治めていた。王は慕駕川で統治した。家畜が多く、水と草を追い求めて移動し、城郭を持たなかった。後に次第に宮殿をつくるようになったが、それでも人民は、なお毛織のテントや百子帳を行屋（移動式の家屋）とした。その地は常に風が強くて寒く、人は砂漠の平原を行くが、砂風が飛来すると、足跡（道）はみなかき消されてしまう。土地が肥沃なところでは、雀と鼠が同じ穴に住み、黄紫の花が生える（『宋書』吐谷渾伝）。しかし痩せた土地ではしばしば毒熱のガス（瘴気）が発生し、人を気絶させ、牛や馬はこのガスを吸うと、疲れて汗を

かき、進むことができなくなる。

宋朝の初年、吐谷渾ははじめて爵位と官職を授かった。宋朝末年に、河南王の吐谷渾拾寅は、使持節、散騎常侍、都督西秦・河・沙三州諸軍事、車騎大将軍、開府儀同三司、領護羌校尉、西秦・河二州刺史となった。

建元元年（四七九）、太祖高帝は、拾寅の本来の官職を驃騎大将軍に昇進させた。宋朝の時、武衛将軍の王世武を河南に使者として派遣していたが、この年、拾寅の使者が王世武[2]に従って来朝した。そこで高帝は、勅書を下して言った。「皇帝は、使持節、散騎常侍、都督西秦・河・沙三州諸軍事、車騎大将軍、開府儀同三司、領護羌校尉、西秦・河二州刺史、新任の驃騎大将軍、河南王に、謹んで安否を問う。当方は王朝が交代し、天命が朕の身にくだり、かたじけなくも大業に当たることになった。慎みと畏れの二重の念から、この夏の時節にますます感情が高まるのを覚える。

王世武が帰国したので、朕は（そなたが宋の後廃帝に宛てた）元徽五年（四七七）五月二十一日付の上表文を受理した。それを拝見すると、そちらは今むし暑いとのこと、お見舞い申し上げる。また、そなたの誠は非常に著しく、遠方の辺境地帯を安寧に保っている。今、詔をくだし、そなたの称号を上位に進め、忠義と真心にむくいよう。王世武を派遣して王命を奉らせ拝授させる。また、王世武らを柔然（芮芮）に行かせたく、そなたが使者たちを助けて、無事目的地に到達できるよう取り計らってくれることを願う。朕は、そなたが献上した馬などの特産物をすべて受け取った。今また別牒（別文書）を付けて、錦、深紅・紫・碧・緑・黄・青などの絹織物をそれぞれ十匹送り届けよう。」

拾寅の息子の易度侯は天文を好み、斉に天文書（星書）を求めたが、朝議した結果、書を与えなかった。拾寅が亡くなると、高帝は、建元三年（四八一）、河南王の世継ぎの吐谷渾易度侯を、使持節、都督西秦・河・沙三州諸軍事、鎮西将軍、領護羌校尉、西秦・河二州刺史、河南王とした。永明三年（四八五）、武帝は勅書をあたえて言った。「易度侯は西蕃の職務を守り、民を安んじなつかせ、誠をつむぎ、忠義と功績をともに挙げた。朕はこれを称賛する。ゆえに、

称号を車騎大将軍に進める。」　武帝は、給事中の丘冠先を河南道に派遣し、あわせて柔然（芮芮）の使者を送りとどけた。丘冠先は永明六年（四八八）に帰国し、吐谷渾で、長さ三尺二寸、厚さ一尺一寸の玉を得た。

易度侯が亡くなると、永明八年（四九〇）、武帝は、易度侯の世継ぎの休留茂を立て、使持節、（都）督西秦・河・沙三州諸軍事、鎮西将軍、領護羌校尉、西秦・河二州刺史とした。武帝はまた、振武将軍の丘冠先を派遣して休留茂に官職を拝受させ、同時に、易度侯のために弔問の礼を行わせた。しかし丘冠先が河南に至ると、休留茂は先に拝礼するよう丘冠先に迫った。丘冠先は、厳しい顔つきをして、これを承知しなかった。すると休留茂は、国人の前で恥をかいたと考え、丘冠先を険しい岩の上につなぎ、深い谷に突き落として殺害した。[3] 丘冠先の字は道玄といい、呉興の人で、晋の吏部郎丘傑の六世の孫であった。武帝が初め、丘冠先を尚書令の王倹に示した時、王倹は武帝にこたえて「この人は、使者の任務にたえない」と言ったが、武帝は丘冠先に対し、再度、王命を奉じさせて河南に派遣した。丘冠先が亡くなると、世祖武帝は、息子の雄に勅書を下して言った。「そなたの父は王命を受けて河南に使いしたが、忠義を命がけで守り、王命をはずかしめなかった。朕は、丘冠先の行いを非常に褒めたたえ、かつ惜しむ。丘冠先の遺体は絶域に失われ、取り戻すことは二度とできないけれども、そなたの将来の官途は保障し、十分な恩恵をあたえよう。」　そして、武帝は雄に銭十万、布三十匹を賜わった。

注

（1）河南つまり吐谷渾が匈奴の種族であるとすることは疑問である。『宋書』吐谷渾伝にいうように、吐谷渾の出自は遼東の鮮卑族（東モンゴル系の民族）であり、遼東から陰山山脈を経て、隴西への大移動は永嘉の乱（三〇七～三一三年）ころであった。それを率いたのが初代王の吐谷渾である。『南斉書』の編者は、当時吐谷渾が「阿柴虜」と周囲の人々から呼ばれていたことから、『三国志』に裴松之が引用する『魏略』西戎伝の中に、「貲虜、本匈奴也。匈奴名奴婢為貲」

とある「（阿）貲虜」と同じと見て、吐谷渾は匈奴の奴婢で、涼州地域に逃亡してきたものと考えたのであろう。（周偉洲二〇〇六：一二～一四、松田寿男一九八七：七二～七六、Molé 1970：73, note 22 参照）。

（2）『南斉書』巻五九芮芮伝によれば、宋の宰相蕭道成（のちの南斉太祖）は四七九年に、吐谷渾経由で使者を芮芮（柔然、蠕蠕）に派遣し、北魏を挟撃することを協議させた。その使者の名前が王洪範〔軌〕であり、本伝に登場する武衛将軍の王世武の任務、時期と類似する。しかし『南斉書』芮芮伝「昇明二年（四七八）太祖輔政、遣驍騎将軍王洪範〔軌〕使芮芮、剋期共伐魏虜」の記事は、『梁書』巻五四芮芮伝および『資治通鑑』巻一三五（四七九年）に採録されており、王洪範〔軌〕と記す。『南史』巻七〇には王洪範の伝が存在するが、芮芮使者のことは記されず、別人のようにおもえるが、一方、王世武の伝は『南斉書』、『南史』にも見えないので、王洪範が王世武の誤りであるという確証もない。（内田吟風一九七一「芮芮伝訳注（南斉書、梁書）」二五三頁、二五九頁参照）。

（3）丘冠先については、『南史』巻七三に伝がある。それによると、丘冠先は南斉の使者として蠕蠕に赴いたが、蠕蠕可汗がかれに先に礼拝するように迫り、丘冠先はそれを拒絶したために殺害されたとし、本伝の記述とは異なる。ただ、『資治通鑑』巻一三六、永明三年（四八五）には、「丘冠先使河南、併送柔然使」とし、また同書巻一三七、永明八年（四九〇）秋七月条に、「河南王度易侯卒、乙酉、以其子伏連籌為秦河二州刺史、遣振武将軍丘冠先拝授、且弔之。伏連籌逼冠先使拝、冠先不従、伏連籌推冠先墜崖而死」とあり、丘冠先が二度にわたって河南国（吐谷渾）に使者として赴き、二度目の河南国（吐谷渾）遣使の時、新たに王位についた吐谷渾の伏連籌（『南斉書』は休留茂）の怒りをかい、殺害されたと同様な記述をする。丘冠先の客死については、何かの事情で、その原因が河南（吐谷渾）ではなく、柔然（蠕蠕）であったと書かなければならない理由が生じたのかもしれない。伏連籌と休留茂との関係については、本書『魏書』吐谷渾伝、注（1）を参照されたい。

『梁書』巻五十四、西北諸戎伝

西北諸戎伝の序

1　河南王国（吐谷渾）
2　高昌（トルファン）
3　滑国（エフタル）
4　周古柯（カルガリク）
5　呵跋檀（カワーディヤン）
6　胡蜜丹（クメドゥ）
7　白題（バルフ）
8　亀茲（クチャ）
9　于闐（ホータン）
10　渴盤陁（タシュクルガン）
11　末国（メルブ）
12　波斯（ペルシア）
13　宕昌（とうしょう）
14　鄧至（とうし）
15　武興（仇池）
16　芮芮（柔然）［省略］

西北諸戎伝の序

西北諸戎について。漢の時代に張騫が初めて西域に足跡を印し、ついで甘英が西海（インド洋・地中海）のほとりにまで到達したとき、西北諸戎のある国は侍子（人質）を漢の朝廷に送り、ある国は献上品を朝廷に奉った。現在は、西域を服従させようと武力を使い果たして、わずかな勝利を得ているが、前代と比較すると、その成果は微々たるもので、遠く及ばないものである。魏の時代において、中国には三国が鼎立し、日々戦争にあけくれた。晋が呉を滅ぼして以降、少し安寧を得、西域に戊己校尉の官を設置したものの、西域諸国はいまだに中国に付き従うことはなかった。ついで、

中原が混乱し（永嘉の乱〔三〇七～三一三年〕）、胡人（五胡十六国）がかわるがわる興って、西域と江東（南朝）を隔絶させ、西域と江東はいくつもの通訳を介在させても、互いに通交することができなかった。呂光が亀茲（クチャ）に遠征したが（三八四年）、蛮夷が蛮夷を討ったにすぎず、中国の意図するものではなかった。それ以来、諸国は分裂と併合を繰り返し、そのため、西域諸国の勝敗や強弱を詳細に記載することは困難である。明珠や翠羽が後宮に満ちても、蒲梢や龍文といった西域の駿馬が、外署（官庁）に納入されることは、ごく稀であった[1]。南朝梁が天命を受けて王朝を創始した時、梁の臣民となり、その正朔を奉じ、朝貢してきたものは、仇池（武興国）、宕昌（とうしょう）、高昌（トルファン）、鄧至（とうし）、河南（吐谷渾）、亀茲（クチャ）、于闐（ホータン）、滑（エフタル）の諸国である。いま、その風俗を書き綴り、「西北戎伝」をつくる。

注

（1）『漢書』巻九六西域伝下「賛曰」の次の文章を踏まえている。「自是之後、明珠、文甲、通犀、翠羽之珍、盈於後宮。蒲梢、龍文、魚目、汗血之馬、充於黄門。」漢武帝の西域遠征以後、西域の珍物が長安の宮殿に満ち溢れたことを述べる文章である。なお、梁元帝『梁職貢図』序（『芸文類聚』巻五五引用）にも、同じ『漢書』西域伝「賛曰」を踏まえた文章がある。「故以明珠翠羽之珍、細而弗有、龍文汗血之驥、却而不乗。（故に明珠、翠羽の珍物はつまらないものとして所有せず、龍文、汗血と呼ばれた名馬もしりぞけて、乗ることはしない。）」と、やはり漢から梁にかけての変化を表現するのに使用する。しかし趣旨はやや異なっており、『梁書』西北諸戎伝の序は『梁職貢図』の序と独立して書かれたものである。

河南王国＝吐谷渾（とよくこん）

河南王の先祖は鮮卑の慕容氏より出ている。初め、慕容弈洛干に二人の息子があり、庶出の長男を吐谷渾、嫡子を慕容廆といった。弈洛干が亡くなると、慕容廆が位を継承し、吐谷渾はこれを避けて西に移動した。廆は兄を追って留めようとしたが、吐谷渾の牛馬がみな西に向かって走りだし、帰ることを承知しなかったので、吐谷渾自身も西に移動し、隴山を越え、枹罕（甘粛省臨夏）を通過し、涼州の西南に出て、赤水（青海の南方）に至り、この地に住んだ。この地はちょうど張掖の南、隴西の西であり、黄河の南にあった。そこで河南と称したのである。河南の境界は、東は畢川に至り、西は于闐（ホータン）と隣接し、北は高昌（トルファン）に接し、東北は秦嶺に通じ、千餘里四方の土地で、これはおそらく昔に流沙と呼ばれた土地であろう。この地は草木に乏しく、雨水が少なく、いつでも氷と雪に覆われていた。ただ六月～七月に、さかんに雨や雹が降った。もし晴れれば、風やつむじ風が吹き、砂や小石が飛んで、常にこの地の景色を覆い隠した。この地には麦が生えたが、他の穀物はなかった。青海の四方には数百里あり、その側に雌馬を放牧すると、すぐに駒を産んだ。土地のものは、この駒を龍種であるといった。このため、その国には名馬が多かったのである。家屋が存在するが、百子帳（大型テント）も混在する。これは穹窿状のテントである。人びとは小袖の袍（ガウン）、小口の袴（ズボン）、大きな頭長裙帽を被った。女性は髪を分け、編んでいる。

その後、吐谷渾の孫の葉延はよく書物を読み、自ら、曽祖父の弈洛干が初めて昌黎公に封じられたので、自分は公孫の子であると言い、礼記には、「王の父の字を国の氏となす」とあるので、葉延は吐谷渾を姓となし、また国号とした。葉延の末孫の阿豺〔犲〕が初めて中国から官爵を受けた。弟の息子の慕延は、宋の元嘉末（四五二年）に自ら河南王を称した。慕延が亡くなると、従弟の拾寅が即位し、かれは文字（漢字）を採用し、城池（城壁都市）を建設し、宮殿を築いた。小王たちもともに邸宅を建てた。その国には仏法があった。拾寅が亡くなると、息子の度易侯が即位した。度

易侯が亡くなると、息子の休留代が即位した。斉の永明年間中（四八三～四九三）、武帝は、休留代を使持節、都督西秦・河・沙三州、鎮西将軍、護羌校尉、西秦・河二州刺史に任命した。

梁朝が興ると、休留代の地位を征西将軍に進めた（五〇二年、『梁書』武帝本紀、天監元年四月条）。休留代が亡くなると、息子の伏連籌が爵位を継承した（五〇四年、『梁書』武帝本紀、天監三年九月条）。天監十三年（五一四）、伏連籌は使者を派遣して金装瑪瑙の鐘を二口献上した。また、上表文を奉って、益州に九層の仏塔を建立したいと申し出たので、詔を下してこれを許可した（『冊府元亀』巻九六八、外臣部朝貢）。天監十五年（五一六）、伏連籌はまた使者を派遣し、赤舞龍駒と特産物を献上した（『冊府元亀』巻九六八、外臣部朝貢）。河南（吐谷渾）は、ある時は一年のうちに再三、使者を派遣して朝貢し、ある時は二年に一度朝貢した。河南の地は益州（四川省）に隣接し、常に商人が往来したので、民はその交易利益に誘われ、多くの人が国境の貿易に従事した。あるものは河南（吐谷渾）の民に文字の読み書きを教え、通訳を行ったが、そのなかには狡猾な商人もいた。普通元年（五二〇）、河南はまた特産物を献上した。伏連籌が亡くなると、息子の呵羅真が即位した。大通三年（五二九）、梁の武帝は勅書を下し、呵羅真を寧西将軍、護羌校尉、西秦・河二州刺史に任命した（五二八年、『梁書』武帝本紀、中大通元年三月条）。呵羅真が亡くなると、息子の仏輔が爵位を継承し（五三〇年、『梁書』武帝本紀、中大通二年四月条）、その世継ぎもまた使者を派遣し、白龍駒を皇太子に献上した。(1)

注

（1）『梁書』河南王国伝の前半は、前史の『宋書』吐谷渾伝と『南斉書』河南伝にもとづく。後半は同時代史料の『梁職貢図』にもとづいて書かれたとおもわれるが、しかし『梁職貢図』河南国の題記はすでに失われており、現在では北宋楼鑰『攻媿集』巻七五に引用された河南使者の題記節文によって、わずかにうかがい知ることができる。「河南出鮮卑慕容

氏吐谷渾之後也。地在河南、古之流沙也。梁天監元年遣使朝貢、献瑪瑙鍾。後或歳再三至、或再歳一至。」（榎一雄「梁職貢図の流伝について」『榎一雄著作集』第七巻一七六頁参照）

高昌（トルファン）

高昌国では、闞氏が王となった。その後、河西王の沮渠茂虔の弟無諱が高昌を襲撃して破ったので、高昌王の闞爽は芮芮（柔然）のもとに逃亡した（四四二年）。無諱は高昌を占拠して王を称したが、一世代で滅びた（四六〇年）。その後、国人はまた麴氏を国王に立てた（四九七年）。その名を嘉といい、北魏は車騎将軍、司空公、都督秦州諸軍事、秦州刺史、金城郡開国公の位を授けた。麴嘉は在位二十四年で死去し、諡を昭武王といった。息子の子堅は、使持節、驃騎大将軍、散騎常侍、都督瓜州諸軍事、瓜州刺史、河西郡開国公、儀同三司高昌王として位を継承した（五三〇～四八年）。

その国はおそらく車師の故地であろう。南は河南（吐谷渾）に隣接し、東は敦煌に連なり、西には亀茲（クチャ）があり、北は敕勒（テュルク）と隣接していた。四十六の鎮を置いたが、交河、田地、高寧、臨川、横截、柳婆、洿林、新興、由寧、始昌、篤進、白力などはみな、その鎮の名である。官職には四鎮将軍、様々な称号の将軍、長史、司馬、門下校郎、中兵校郎、通事舎人、通事令史、諮議、校尉、主簿があった。

国人の言語は中国とほぼ同じである。五経、歴代の史書、諸子集（経・史・子・集）を持っている。容貌は高麗（高句麗）と似ており、辮髪を背中にたらし、丈の長い小袖の袍（ガウン）、縵襠袴（ズボン）を着用した。女性は頭髪を編んだが肩に垂らさなかった。錦纈、纓絡（ネックレス）、環釧（腕輪）を身につける。婚姻には六つの儀礼がある。その国は、標高が高くて、乾燥しており、土塁の城を築き、木造家屋をつくり、屋根は土で覆う。寒暑は益州とほぼ同

じである。九種類の穀物をそろえて植え、人々の多くは麦こがしやヒツジ・ウシの肉を食べる。良馬、ブドウ酒、石塩を産する。草木が多く、草の実は繭に似ており、繭の中の糸は細い麻糸のようである。その名を白畳子（綿花）といい、国人の多くがこれを取って織り、綿布をつくった。綿布は非常に柔らかくて白い。市場で交易する時にこれを（貨幣として）用いる。朝烏という鳥がおり、毎朝、王の宮殿の前に集る。そして行列をつくり、人を恐れない。太陽が昇ると飛び去る。

大同年間中（五三五～五四六）、麴子堅は使者を派遣して鳴塩枕、ブドウ、良馬、氈毹（毛織の敷物）などの特産物を献上した。[1]

注

（1）本伝の後半「国人の言語は中国とほぼ同じ」から、最後の「麴子堅の鳴塩枕などの梁朝への献上」までの文章は新発見の張庚摸本『梁職貢図』の高昌国使図に付された題記にほぼ一致する。ところで、本伝の前半の情報源が謎である。まず、梁朝が高昌国王に授けた爵位称号を挙げるかわりに、ライバルの北魏の授けた称号を記す。しかも『魏書（北史）』高昌伝に記されたものとは異なる。ついで高昌国内の城鎮名十二を挙げるが、これほど詳しい資料は北朝史料に見えない。（嶋崎昌一九五九）。続いて述べる官職名についても同様である。いきさつは不明であるが、早くに散逸した『魏書』高昌伝の原文がここに採用されているのではないだろうか。

滑国（エフタル）[1]

滑国は、車師（トルファン）の別種である。後漢の永建元年（一二六）、八滑が班勇に従って北虜（匈奴）を撃って功績をあげたので、班勇が八滑の働きを朝廷に上奏して後部親漢侯に任じられた。魏・晋以後は、中国に通好すること

はなかったが、天監十五年（五一六）になって、王の厭帯夷栗陁（エフタル）が初めて使者を派遣して特産物を献上した。普通元年（五二〇）、また使者を派遣して黄色の獅子（ライオン）、白貂の皮衣、波斯（ペルシア）の錦などを献上した。普通七年（五二六）、また表を奉って貢献してきた。

北魏が桑乾川（平城）に都を定めたとき（三九八～四九五年）、滑国はまだ小国であり、芮芮（ジュウゼン）に服属した。その後、次第に強大になり、隣国の波斯（ペルシア）、盤盤（南史、渇盤陀、タシュクルガン）、罽賓（ガンダーラ、アフガニスタン）、焉耆（カラシャール）、亀茲（クチャ）、疏勒（カシュガル）、姑墨（アクス）、于闐（ホータン）、句盤（カルガリク）などの国々を征服し、領地千里あまりを拡張した。土地は温暖で、山川樹木が多い（『梁職貢図』、『南史』「多山川、少樹木」）。五穀を産する。国人は、麦こがし（麨）や羊の肉を食糧にする。この国の動物には獅子（ライオン）、両脚（両峰の誤）の駱駝（ふたこぶラクダ）、角のある野驢がいる。人はみな弓矢を得意とする。丈の長い小袖の袍を着用し、金玉の帯を締める。婦人は皮衣をかぶり、頭の上に木を刻んだ角をのせる。その長さは六尺で、金や銀でこれを装飾する。女性が少ないので、兄弟で妻を共有する。城郭はなく、毛織のテントに居住し、東側に戸口を開く。王は黄金の玉座に坐り、木星の動きに従って、王の居処を変える。王は妻と一緒に並んで坐って接客した。文字はなく、木を刻んでしるしとする。隣国と通好するばあい、隣国の胡人に胡書を作成させ、羊の皮を紙とする。官職はない。天神・火神（ゾロアスター教）を信奉し、毎日、屋外に出て神を祭り、それから食事をする。国王に拝礼するとき、跪いて一度おじぎをするだけである。葬儀の時には木で棺をつくる。父母が死亡すると、子供は耳を一つ切り、葬儀が終われば吉となる。言語は河南（吐谷渾）人の通訳を介して、ようやく通じることができる。

注

（1）榎一雄「滑国に関する梁職貢図の記事について」（『榎一雄著作集』第七巻）は、同図滑国使者の題記（説明文）と

『梁書』滑国伝の文章を比較検討し、『梁書』滑国伝は梁職貢図に基づいたものと判断した。『梁職貢図』に存在して、『梁書』滑国伝に見られない記事も若干ある。「無職官」のあとに、「降小国、使其王為奴隷。事天神（火神を欠く）。」とあり、また朝貢使者の名前、「蒲多達……」（天監十五年）、王使者「冨何了了」、王妻の使者「康符真」（普通元年）が記されている。南朝梁元帝『梁職貢図』は、当時、梁に朝貢してきた諸外国三十余国の使者の図像と題記が存在したはずであり、すでに見てきたように、『梁書』巻四八、「諸夷」の大部分が、それを主資料にしたとおもわれる。なお、榎一雄の『梁職貢図』および「エフタル」についての一連の研究論文は、『榎一雄著作集』第一巻、第七巻（汲古書院、一九九二～四年）に収録されている。

周古柯（カルガリク）

周古柯国は、滑国のそばにある小国である。普通元年（五二〇）、使者を滑国の使節に従わせて来朝させ、特産物を献上した。

呵跋檀（カワーディヤン）

呵跋檀国もまた滑国のそばにある小国である。滑国のそばにある国は総じて、衣服も容貌もみな滑国と同じである。普通元年（五二〇）、使者を滑国の使節に従わせて来朝させ、特産物を献上した。

胡蜜丹（クメドゥ）

胡蜜丹国も滑国のそばにある小国である。普通元年（五二〇）、滑国に従って使者を来朝させ特産物を献上した。[1]

注

（1）以上の三カ国の文章は北宋模本および張庚摸本『梁職貢図』の題記に一致する。なお、『梁職貢図』は、それらの文章のあとに上表文を載せ、梁武帝に対する祝福と献上品名が記されている（趙燦鵬二〇一一：一一三）。なお、それらの諸国を含め、北宋摸本（現在、北京、中国国家博物館蔵）に残る十三カ国の題記の翻訳は榎一雄「描かれた倭人の使節」（『榎一雄著作集』第七巻一七二～三頁）で見ることができる。

白題（バルフ）

白題国の王の姓は支、名は史稽毅といい、先祖はおそらく匈奴の別種の胡であろう。漢の灌嬰が匈奴と戦った時、白題の騎兵一人を斬った。いま白題は滑国（エフタル）から東へ六日行程のところにある。その西の最果てに波斯（ペルシア）がある。その地は粟、麦、瓜菓を産出し、食べものは滑国とほぼ同じであった。普通三年（五二二）、使者を派遣して特産物を献上した。[1]

注

（1）本伝も記述の順序を変更するものの、『梁職貢図』題記と同文。ただ、最後の朝貢使の名前を省く。「普通三年、白題道釈氈独活使安遠悩（隣）伽到京就貢献（普通三年に白題道釈の氈独活は安遠悩伽を京師に至らせ、朝貢させた）」とある。また、本伝に「今在滑国東、去滑六日行」とあるところは、現存の『梁職貢図』題記、北宋摸本「今在滑国東六十日行」、張庚摸本「今在滑国六日行」とあり、それらを比較して、原文を「今在東去滑国六日行」と復元して右のように翻訳した。そうすれば東からエフタルの根拠地の滑国（活国）、つまりアフガニスタンのクンドゥズ、白題（バルフ）、波斯（ペルシア）と並び、地理的には問題がない。榎一雄「梁職貢図について」（『榎一雄著作集』第七巻一二二頁）の

ように、滑国の位置をヘラート東方、ハリー・ルード河上流域のグールに当てる必要はなくなる。

亀茲（クチャ）

亀茲は、西域の旧国である。後漢の光武帝の時、亀茲王の弘は、莎車（ヤルカンド）王の賢に殺され、王の一族が滅ぼされた。賢は息子の則羅を亀茲王としたが、国人もまた則羅を殺した。匈奴は亀茲貴人の身毒を擁立して亀茲王とし、それ以来、亀茲は匈奴に服属した（『後漢書』巻八八西域伝、莎車国）。しかし亀茲は漢の時代を通じて常に大国であり、都を延城といった。魏の文帝が初めて即位すると（二二〇年）、亀茲は使者を派遣して貢物を献上した。晋の太康年間中（二八〇～二八九）に亀茲王は子供を入侍させた。太元七年（三八二）、前秦の苻堅が将軍の呂光を派遣して西域を征伐させた。呂光が亀茲に到達すると、亀茲王の帛純は宝を車に載せて出奔し、呂光は亀茲の城に入った（三八四年七月）。城には三重の城壁があり、外城は長安城と等しかった。部屋は壮麗で、琅玕（玉に似た美しい石）、黄金、玉で装飾されていた。呂光は帛純の弟震を王に擁立して帰国した（『晋書』呂光伝、亀茲伝）。これ以来、亀茲は中国と通好を絶った。普通二年（五二一）、王の尼瑞摩珠那勝は使者を派遣して表を奉り、貢物を献上した。[1]

注

（1）ここでは本伝も、『梁職貢図』亀茲題記も、ほとんど梁朝と関わる記事を含んでいない。それぞれ過去の史料から亀茲に関するものを抜き書きしただけのもので、しかも内容は一致しない。梁朝は亀茲を朝貢国の一つに数えているが、朝貢の回数も少なく、情報に欠けていたことを示す。

于闐（ホータン）

于闐は西域に所属している。後漢の建武年間の末（五十五年頃）、于闐王の兪は莎車（ヤルカンド）王の賢に撃破された。賢は兪を驪帰王に左遷し、その弟の君得を于闐王とした。君得は暴虐であったので、人々は苦しんだ。永平三年（六〇）、于闐大族の都末が君得を殺した。しかしその後、大人の休莫霸もまた都末を殺して自ら即位し、王となった。霸が亡くなると、兄の子の廣得が即位した。かれはその後、莎車王の賢を撃破し、生け捕りにして帰還し、殺害した。こうして于闐は強国となり、西北の小さな諸国はみな于闐に服従した（『後漢書』西域伝、莎車国、于闐国）。

その地は潦水（たまり水）と沙石が多く、気候は温暖で、イネ、ムギ、ブドウをよく産出する。川では玉が採取でき、その河を玉河という。国人は銅器を巧みに鋳造する。この国の治所は西山城という。家屋と市場がある。草木の実や野菜は中国と同じである。仏教を深く信仰する。王の居室には朱色の絵画が描かれている。王冠の金の頭巾は、いまの胡人（ソグド人）の公帽に似ている。王は妻と並んで坐って接客する。この国の婦人はみな辮髪をし、皮衣の袴（ズボン）を着用した。国人は恭しく、対面する時には跪く。跪く時には片方の膝を地につける。文字を書きしるす時は、木札（木簡）を使用する。玉で印鑑を作る。国人は手紙をもらうと頭に戴き、あとで札（手紙）をあける。

魏の文帝の時代（黄初三年＝二二二）、王の山習は文帝に名馬を献上した。梁の天監九年（五一〇）、于闐は使者を派遣して特産物を献上した。天監十三年（五一四）にはまた波羅婆歩鄣を献上した。天監十八年（五一九）にはまた瑠璃罌を献上した。大同七年（五四一）、また外国で刻まれた玉の仏像を献上した。[1]

注

（1）本伝の後半、「其地多水潦沙石」から最後の「天監十三年の朝貢」までは、新発見の張庚摸本『梁職貢図』于闐題記のほぼ全文を採用する。本文中の「波羅婆歩鄣」は張庚摸本には「婆羅等鄣」とあるが、ともに意味は不明。

渴盤陁（タシュクルガン）

渴盤陁国は、于闐の西にある小国である。西は滑国（エフタル）、南は罽賓国（ガンダーラ）に隣接し、北は沙勒国（カシュガル）に連なる。治所は山谷の中にある。城の周囲は十餘里で、国には十二の城がある。風俗は于闐と同類であった。古貝（木綿）の衣服を着用し、丈の長い小袖袍（ガウン）や小口の袴（ズボン）を着用する。その地は小麥（麦）の栽培に適し、これを食糧とする。ウシ、ウマ、ラクダ、ヒツジ等の家畜が多い。良質の毛織物や金、玉を産する。王の姓は葛沙氏であった。中大同元年（五四六）、使者を派遣して方物を献上した。[1]

注

（1）本伝もほぼ新発見の張庚摸本『梁職貢図』渴槃陀の題記の全文に一致する。題記にあって、本伝に欠けているのは、服装の「深壅皮靴（深めのブーツ）」、小麥のほか「大麥」、朝貢者の名前「史蕃匿」とである。ただ、題記は朝貢年を大同元年とするが、『梁書』武帝本紀には、中大同元年十二月に盤盤国（タシュクルガン）の朝貢を記している。

末国（メルブ）

末国は、漢の時代の且末国（チェルチェン）である。勝兵は一万戸あまりであった。北は丁零（テュルク）、東は白題（バルフ）、西は波斯（ペルシア）にそれぞれ隣接した。土着民は髪を切り、毛織の帽子、小袖の衣装を着用し、衫をつくって首もとを開いて前で縫った。ウシ、ヒツジ、ラバが多かった。王の安末深盤は普通五年（五二四）、遣使して貢献した。[1]

注

（1）北宋模本に題記の上半分が残存するが、本伝はその全文を採用したものであることは、ほぼ確実である。また、末国

が漢代の且末にあたるというのは、その地理的位置の記述からみて、編者の誤解であることがわかる。

波斯（ペルシア）

波斯国は、その先祖に波斯匿王（プラーセナジド）というものがおり、子孫は王の父親の字を氏とし、それで「波斯」が国号となった。この国には城があり、その周囲は三十二里、城壁の高さは四丈で、みな楼観が備わる。城内の家屋は数百から千間あり、城外の仏教寺院は二～三百箇所にある。都城の西方十五里のところに土山があり、山はさほど高くなく、その姿は非常に遠くまで連なっている。山の中には鷲鳥が生息していて羊を食ったので、土着民はそれに悩まされる。その国には優鉢曇花があり、色鮮やかな花で、かわいい。この国は、龍駒馬を産した。塩分の多い池に珊瑚樹が生えるが、長さは十二尺である。また、琥珀、瑪瑙、真珠、玫瑰などがある。国内ではこれらを珍品とは考えない。市場での売買のさいには金銀を用いた。婚姻の方法は、結納の儀式が終われば、花婿は数十人を従えて花嫁を迎える。また花婿は金糸の入った錦袍や獅子（ライオン）の模様の入った錦袴を着用し、天冠をかぶる。花嫁もまたこれと同じような格好をする。花嫁の兄弟は花婿がやって来ると手をとって付き従い、夫婦の礼はそれで完了する。この国の東は滑国（エフタル）、西と南はともに婆羅門国（インド）、北は汎慄国（拂菻＝東ローマ）と隣接する。中大通二年（五三〇）、使者を派遣して仏牙を献上した。[1]

注

（1）『梁職貢図』波斯国使の題記は、珍しく北宋摸本と張庚摸本の両方に保存された。前者が約二五〇字、後者が一三四字である。本伝が約二一五字であり、どちらが原本に近いのかとまどう。しかし三者の内容は決して「波斯（ササン朝ペルシア）」のものとは言えず、関連するのは最後の朝貢使節の到来を告げる一行のみである。その割に字数が多いのは、

編者が「波斯」を古代インドのシュラーヴァスティー国王のプラーセーナジド（波斯匿と表記）、同じくヴァラーナシー国（波羅奈斯）と混同して、資料を抜き出したからに他ならない。『梁職貢図』編者が、いかに「波斯（ペルシア）」についての知識を欠いていたか示すものである。

宕昌（とうしょう）

宕昌国は、河南（吐谷渾）の東南、益州（四川省成都）の西北、隴西の西にあり、羌族の一種である。宋の孝武帝の時代、王の梁瓘忽が初めて特産物を献上した。梁の天監四年（五〇五）、王の梁彌博が甘草・当帰（薬草）を献上してきた。武帝は詔を下して、梁彌博を使持節、都督河・涼二州諸軍事、安西将軍、東羌校尉、河・涼二州刺史、隴西公、宕昌王に任命し、金章を佩びさせた。彌博が亡くなると、息子の彌泰が即位した。大同七年（五四一）、梁武帝は彌泰にも父の爵位を授けた。この国の服装と風俗は河南（吐谷渾）とほぼ同じである。[1]

注

（1）本伝は『梁職貢図』題記にほぼ等しい。題記は北宋摸本と張庚摸本に残るが、前者は破損があって、後半の文章のみである。題記は宋朝と梁朝のあいだのできごととして、「斉永明中、宕昌王梁彌機。機死、彌顔立」を載せるが、本伝は欠く。

鄧至（とうし）

鄧至国は、西涼州の境界に住む羌族の別部族である。代々、持節、平北将軍、西涼州刺史を号した。宋の文帝の時、王の象屈耽が遣使して馬を献上した。天監元年（五〇二）、詔を下して鄧至王の象舒彭を（都）督西涼州諸軍事となし、

安北将軍と号させた。天監五年（五〇六）、象舒彭は遣使して黄耆（薬）四百斤と馬四匹を献上した。この国の人びとは、帽子を「突何」と呼んだ。衣服は宕昌と同じである。(1)

注

（1）題記は北宋摸本と張庚摸本に完全な形で残り、本伝とほぼ一致する。若干の出入りがあり、本伝にある天監元年の称号授与の一文を両題記ともに欠く。逆に題記は本伝にない朝貢使者の名前を含んでいる。

武興（仇池）

武興国は、もともと仇池といった。楊難當が即位して秦王となった。宋の文帝が裴方明を派遣してこれを討伐させたので、楊難當は北魏に逃亡した。（そのあと）楊難當の兄の子文徳が民を茄盧に集め、宋から爵位を授かったが、北魏はまたこれを攻撃したので、文徳は漢中に逃げた。従弟の僧嗣が即位し、ふたたび茄盧に軍隊を駐屯させた。僧嗣が亡くなると、文徳の弟の文度が即位し、弟の文洪を白水太守に任じ、武興に駐屯させた。宋はこれを武都王となした。武興の建国はこれより始まった。楊難當の族弟の廣香もまた文度を攻め殺し、即位して、陰平王、茄盧鎮主となった。廣香が亡くなると息子の炅が即位し、炅が亡くなると息子の崇祖が即位した。崇祖が亡くなると息子の孟孫が即位した。斉の永明年間中（四八三～四九三）に、北魏の南梁州刺史・仇池公の楊霊珍が泥功山を足がかりとして斉に帰順した。斉朝は楊霊珍を北梁州刺史、仇池公とした。文洪が亡くなると、一族の集始が北秦州刺史、武都王となった。天監初（五〇二）、梁朝は集始を使持節、都督秦雍二州諸軍事、輔国将軍、平羌校尉、北秦州刺史、武都王とし、霊珍を冠軍将軍、孟孫を仮節、（都）督沙州刺史、陰平王とした。集始が亡くなると、息子の紹先が爵位を継承した。天監二年（五〇三）、霊珍を持節、（都）督隴右諸軍事、左将軍、北梁州刺史、仇池王とした。天監十年（五一一）、孟孫が亡くなる

と、詔を下して孟孫に安沙将軍、北雍州刺史の称号を贈った。息子の定が封爵を継承した。紹先が亡くなると、息子の智慧が即位した。大同元年（五三五）、智慧は漢中の支配を回復することに成功した。智慧は使者を派遣し、上表文を奉って、四千戸を率いて梁国に帰順したいと請願した。勅書を下してこれを許可し、その地を東益州とした。

その国の東は秦嶺山脈に連なり、西は宕昌に隣接した。宕昌までは八百里あった。南は漢中を去ること四百里、北は岐州を去ること三百里、東は長安を去ること九百里であった。もともと戸数が十万あったが、時代を下るにしたがって、だんだんと戸数が減少していった。その大姓には苻氏、姜氏がある。言語は中国と同じである。烏皁突騎帽、丈の長い小袖の袍（ガウン）、小口の袴（ズボン）、皮の鞾（くつ）を着用する。その地は九穀（九種類の穀物）を植える。婚姻には六つの儀礼が備わり、書疏（読み書き）を知っている。桑と麻を植え、紬、絹、精布、漆、蝋、椒などを産出し、山からは銅と鉄を産出する。[1]

注

（1）武興国の『梁職貢図』題記は張庚摸本にのみ残る。量的には少なく、本伝の「大同元年」以下の文章に相当する。本伝の前半は、武興国（仇池）の建国から大同元年（五三五）の梁朝への帰順までを詳しく記述し、題記の文章につないでいる。題記と本伝とは文章の順序をいくらか変更するものの、内容の相違はない。

『魏書』巻一〇一、吐谷渾伝、高昌伝

吐谷渾（とよくこん）

吐谷渾はもともと遼東の鮮卑族、徒河渉帰の息子である。渉帰は、またの名を弈洛韓といい、二人の息子がいた。庶子の長男が吐谷渾で、次男を若洛廆といった。渉帰が亡くなると、若洛廆が代わって部落を統べ、別に慕容氏の王となった（位二八五～三三三年、前燕の祖、『晋書』巻一〇八慕容廆伝）。渉帰は存命中、戸七百を分けて吐谷渾に与えた。だが、吐谷渾と若洛廆の二匹の馬が戦って互いに傷ついた。若洛廆は怒り、人を派遣して吐谷渾に言わせた。「先代は部落を処分し、兄上に別の部落を与えたのに、どうして遠くにいないで、私の馬と戦わせて互いに傷つけあうのか。」これに対し吐谷渾は、「馬は畜生にすぎない。草を食べ、水を飲み、春になると活動して闘うのだ。闘いは馬同士の話であり、その怒りが人間に及ぶのか。そむき別れることは容易である。いま、おまえのもとを去って万里の外に去ろう」と言った。若洛廆は後悔し、旧老と長史の七那楼を派遣して吐谷渾に謝り、この地に留まらせようとしたが、吐谷渾は、「我々は祖先以来、遼右に徳を立てた。先代の時、占いの言葉に、二人の子があって、さいわいは子孫に伝わるだろう、と予言された。私は卑しい庶子なので、道理として二人並んで盛大となることはできない。いま馬のことで別れるようになったのは、天の啓示であろう。諸君、試みに馬を駆って東に向けてくれ。馬がもし東に帰るのなら、私もきっとそれに従って東に戻ろう。」と言い、従騎に命令して馬を廻させた。馬は数百歩進むと、突然悲鳴をあげ、走り出して西へ向かった。そのいななきは山を崩すかのようであった。このような試みが十回あまりも繰りかえされたが、馬たちは、ひとたび旋回し、ひとたび迷走した。七那楼は根負けすると、吐谷渾に向かって跪き、「可汗よ、これはもう人事のなせるわざではございません」と言った。吐谷渾は、自分の部族に向かって「私の兄弟・子孫は、みな栄える

であろう。若洛廆は、子や玄孫達に繁栄を伝え、それは百餘年間、つづくであろう。私の場合は玄孫になって初めて繁栄が顕著になるだろう」と言った。そこで吐谷渾はとうとう西に移動して陰山に到達し、その後、道を借りて隴山に至った。若洛廆は、吐谷渾を想って阿干の歌をつくった。徒河（鮮卑族の出身地）のことばでは兄のことを「阿干」と呼んだ。廆の子孫が帝王を僭称したとき、この歌を輦後に鼓吹する大曲とした。

吐谷渾はついに移動して隴山にのぼり、枹罕で止まって甘松に至り、南は昴城、龍涸を境界とし、洮水の西南から白蘭を極めること数千里のうちで水と草を追い求め、テントを張って住まい、肉や酪を食糧とした。西北の諸族はこれを阿柴虜と呼んだ。

吐谷渾が亡くなると六十人の子がのこった。長男の吐延は身の丈が七尺八寸で、勇敢さと力は人よりも優れており、性格は凶暴で、昴城の羌族の酋長姜聡に刺された。吐延は剣がまだ体内に刺さっている時、息子の葉延を呼びよせ、大将の紇拔涅に語って言った。「私が絶命したら、すぐに遺体を納棺しおえ、早くここを去って白蘭を保て。白蘭の地は険阻で遠く、またその住民は惰弱だから統御しやすい。葉延は子供なので、だれかに王位を授けたいが、おそらく、この緊急事態には制御できないだろう。いま葉延をおまえに預ける。おまえは股肱の力を尽くして、この子を助けてくれ。息子が王位に就くことができれば私に恨みはない。」こう言うと、吐延は剣を抜いて死んだ。吐延には子供が十二人いた。

葉延は幼かったが勇猛果敢であり、年齢は十歳であったが、草を縛って人のかたちを作り、姜聡と名づけ、毎朝これに矢を射込んだ。矢が命中すると号泣した。母親が「賊への復讐は諸将がすでに果たし、賊を殺してなますにしました。おまえは幼いのに、なにゆえ毎朝、自ら苦しんでいるのですか。」と言うと、葉延は嗚咽し、こらえきれずに母親に答えて言った。「無益なことはよく分かっています。しかし、心の奥底において、この痛みに耐えられないのです。」葉延

は非常に親孝行であり、母親が病気の時に三日間食事をしないと、葉延もまた三日間食事をしなかった。葉延は書伝をよく調べ、曽祖父の弈洛韓（渉帰）が初めて昌黎公に封じられたので、自分は公孫の子であると考えた。そして、『礼記』を調べ、「公孫の子は王の父親の字を氏となすことができる」という言葉を見つけ、これに従って祖父吐谷渾の名を氏となした。

葉延が亡くなると、息子の碎〔辟〕奚が即位した。碎奚の性格は慎み深く、三人の弟が専権したが、碎奚はこれを制御できず、大将達がこれを共同で誅殺した。碎奚は憂い悲しんで政務を行えず、息子の視連を立てて世継ぎとし、これに政治を任せて「莫賀郎」と号した。これは中国語で父親という意味であった。碎奚は、とうとう憂悶して死んだ。視連は即位すると、父親のことを憂い、遊興も宴会も行わなかった。視連は、王となってから十五年で亡くなり、弟の視羆が即位した。視羆が亡くなると、息子の樹洛干らはまだ幼かったので、弟の烏紇提が即位し、樹洛干の母親を妻として、二人の子、慕瓚と利延を生んだ。烏紇提は別名を大孩といった。烏紇提が亡くなると樹洛干が即位し、自ら車騎将軍を号した。その年は晋の義熙初年（四〇五年）であった。樹洛干が亡くなると、弟の阿豺〔犲〕が即位し、自ら驃騎将軍、沙州刺史を号した。部内には黄砂があり、その周囲数百里には草木が生えない。それで、この地を「沙州」といった。

阿豺は羌と氐を併呑し、吐谷渾の地は数千里四方となり、強国を号した。西強山で狩りをし、墊江の源流を観察して群臣に問うて言った。「この水は東に向かって流れる。なんという名だ？　どの郡国から、どこの水に流れ込むのか？」長史の曽和は、「この水は仇池をへて晋寿を通過し、宕渠に出て墊江と号します。巴郡に至って長江に流れ込み、広陵をわたって海と合流します。」と言った。阿豺は「水ですら帰る場所を知っている。私は塞表の小国であっても帰る所もない」と言った。阿豺が劉義符（宋の少帝）に使者を派遣して特産物を献上したので、劉義符は阿豺を澆河公に

封じた。しかし、阿豺がまだこれを拝受しないうちに、劉義隆（宋の文帝）が、元嘉三年（四二六）に再度、阿豺に新たな官職を与えた。そこで阿豺は宋に遣使朝貢したが、たまたま病気にかかった。阿豺は死にのぞんで子弟達を呼び寄せて告げた。「先王の車騎将軍・樹洛干は、自分の息子虔を捨てて大業（王位）を私に譲ってくれた。私はどうして先王の行いを忘れ、あえて自分一人の計らいで息子の緯代に位を譲れようか。王位は慕璝に継がせる。」阿豺には二十人の息子がおり、緯代が長男だった。阿豺はまた、「おまえたちは各々、私に一本ずつ矢を献上せよ。私はそれらをあの世（地下）に持参し、もてあそびたい（「折之地下」は「玩之地下」の誤り、『北史』同伝参照）」と言った。それから同母弟の慕利延に命じて言った。「おまえはその矢の一本を折ってみよ。」慕利延は、命令どおり一本の矢を折った。すると阿豺はまた言った。「それでは十九本の矢を取って折ってみよ。」しかし、慕利延は十九本の矢を折ることができなかった。阿豺は言った。「おまえは知っているか？　一本の矢はたやすく折れるが、矢が多ければ切断することは難しい。おまえたちは力をあわせ心を一つにして協力しろ。そうすれば社稷（国家）は強固となる。」阿豺は言い終えると亡くなった。阿豺の死後、兄の息子の慕璝が即位した。

これ以前、阿豺の時代、劉義隆の命令は、とうとう吐谷渾に達することなく亡くなった。慕璝はまた宋に表を奉って劉義隆と通好し、劉義隆はまた隴西公の称号を慕璝に授けた。慕璝は、秦州と涼州に亡命している漢人、羌戎など諸々の夷狄を招集し、五、六百の部落になった。それから慕璝は、南は蜀（四川）、漢（漢水上流域）と通好し、北は涼州、赫連氏（夏国）と通交し、吐谷渾の勢力は次第に隆盛になった。（以上は、南朝系史料、とくに『宋書』吐谷渾伝による。これより以下の文章が『魏書』吐谷渾伝、本来の史料である）

世祖太武帝（四二三～五二）の治世中、慕璝は初めて侍郎の謝大寧を北魏に派遣して上表文を奉り、北魏に帰順した。ついで、赫連定を討って捕虜とし、身柄を京師（平城）に送った（四三二年）。太武帝は喜び、吐谷渾に使者を派遣し

て慕璝に大将軍、西秦王を授けた。慕璝は上表して言った。「臣はまことに凡庸、脆弱ですが、敢えて誠心を尽くし、僭称の逆賊を生け捕って王府の宗廟に献上（献捷）いたしました。爵位は昇格させていただきましたが、領土の賦与はなく、車旗は備わりましたが、財貨による褒賞は十分にいただいておりません。どうか、実情をよく勘案のうえ、書状の意をおくみ取り下さい。臣は近頃、入寇した逆賊と応戦し、そのため辺境の民達は賊に劫略され、東方に流浪しております。今、皇帝の教化が天下にあまねくいきわたり、民衆は郷里への帰還を望んでいます。また、乞佛日連、窟略寒、張華の三人は家が没落し、吐谷渾に亡命して、ここにおります。家族と離れ離れとなり、不憫であります。どうか陛下の勅書を携えた使者を派遣して、かれらをお救いくだされ、遠い未開の地に恩沢を及ぼされますならば、感謝のきわまりです。」

太武帝は公卿に詔をくだし、公卿たちを朝廷に集め、どのように（吐谷渾へ）返答するか議論させた。太尉の長孫嵩をはじめ、議郎、博士たち二七九人が議論して言った。「かつて役人は、西秦王が荒外の君主であり、政教の及ばない地であったため、朝貢してくればそれを受け、来なければそのまま放置してきました。皇帝の威光が遠方まで及んだので、西秦王は義を慕い威光を恐れて臣を称し、貢物を納めて爵位と称号を受けたいと申しているのです。われわれ議者が思いますに、昔の要服・荒服の君主は領地が広く人民が多くても、爵位は中国王朝の基準になぞらえることはありませんでした。陛下は吐谷渾王に度を越えた恩寵、官爵を加えられました。容飾・車旗、班爵は大国（上国）並みにされました。下賜する絹の数量については、旧典に記されていません。みな、そのときの状況に応じ、臨機応変に、その多寡を決めました。漢魏以来の例を考えますに、荒服や遐服の地を慰撫した時の故事がいくらかあります。呂后は、匈奴の冒頓単于に対し、車を二乗、四頭だての馬車を二つ与え、単于はこれに応えて馬千匹を漢に贈りました。その後、匈奴は漢と和睦したので、漢は対等の立場となった匈奴に絹を贈りましたが、その数は数百を越えませんでした。呼韓邪

単于が臣を称して自ら入朝したので、漢は初めて匈奴に絹一万匹を贈りました。いま西秦王が、領地に桑と蚕がないため北魏に絹を請願しているのだとしたら、褒賞の財貨が不足であるとは言えません。むかし周王室が衰退し、斉の桓公がひとたび天下を救いましたが、賜胙の命（天子から宗廟祭肉の分与されること）はあっても、褒賞として領地を与えられる事はありませんでした。晋の文公は楚を城濮で破った時、南陽の田を受け、それを朝宿の邑（参勤のさいの住宿）にあてたにすぎませんでした。西秦王の朝廷への功績は赫連定の件のみです。塞外の民は、時機に便乗して、秦州・涼州に侵攻しただけです。辺境を開拓したという功績に値せず、しかも爵位を上国並みとなり、秦、涼、河、沙の四州の土地を支配しながら、『新しい領地の賜与がない』と言います。わが王朝を衰弱した周にたとえ、自らを春秋の五覇と同等とみなしている。飽くことのない欲望を極めるとは、このことをいうのでしょうか。西秦王が朝廷に忠義を尽くすのは、その本性がいかようなものであるか知っておれば、必ずこのような事態にならず、側近が聡くなかったために、このような災いを招いたのでしょう。西秦の流人や敵賊に掠奪された者については、調査したところ、みな蒲坂に集住しています。いますでに藩を称し、四方はみな安泰となり、天下は一家のようにまとまったうえは、秦州に勅書を下し、京師（平城）に連行し、その後、希望するところに随時帰還させればよろしい。乞佛日連ら三人は、かつて外国（賓国）の使者であり、吐谷渾の王庭に滞在する間に、国家が滅亡し、吐谷渾の臣下となったもので、その希望は認められるべきではありません。」　そこで太武帝はつぎのような命令を下した。「公卿達の議論は、大筋では間違ってはおらぬ。西秦王が領有した金城、枹罕、隴西の地は、慕璝自身が奪取した土地なので、朕はこれを西秦王に与える。つまり、これは土地を割譲することで、領土を増し与るということにはならない。西秦が親しく朝貢し、そのたびに下賜品の綿・絹の数量を増加させている。しかも下賜は今回限りというのではない（四三二年、『資治通鑑』巻一二二、元嘉九年三月条によれば「非一匹而已」は「非一賜而止也」）。」これより慕璝の朝貢は少し疎かになり、またかれは宋朝

の劉義隆（宋文帝、在位四二四～五三年）とも通好するようになった。劉義隆は慕璝を隴西王に封冊した。

太延二年（四三六）、慕璝が死没し、弟の慕利延が即位したので、詔をくだして使者を派遣し、慕璝に恵王というおくり名を与えた（『資治通鑑』巻一二三、元嘉十三年）。その後、慕利延に鎮西大将軍、儀同三司を授け、改めて西平王に封冊した。また慕璝の息子元緒を撫軍将軍となした。このとき慕利延は劉義隆とも通好し、劉義隆は慕利延を河南王に封じた。太武帝が涼州を征伐したので、慕利延は恐れ、とうとう部下を引き連れて西に走り砂漠に逃亡した。太武帝は、慕利延の兄に赫連定を捕縛した功績があったので使者を派遣して悔い改めるように説得し、慕利延は帰還した。その後、慕利延は使者を派遣して太武帝に謝罪し、上奏文をたてまった。そこで太武帝は詔を下してこれを褒章した。慕利延の兄の子緯代は、慕利延に危害を加えられる事を恐れ、太武帝の派遣した使者と共に謀って北魏への帰順を望んだ。慕利延はこれを知ると、緯代を殺害した。緯代の弟の叱力延ら八人は逃亡して京師（平城）に帰順し、太武帝に対し、軍勢を派遣して慕利延を討伐するよう請願した。太武帝は叱力延を帰義王に任命し、晋王の伏羅に詔を与え、諸将を率いて慕利延を討伐させた。北魏の軍勢が大母橋に至ると、慕利延の兄の息子拾寅は河西に逃走し、伏羅は将軍を派遣してこれを追撃させ、五千あまりを斬首した。慕利延は白蘭に逃走し、慕利延の従弟伏念、長史の鶏鳩黎、部大の崇娥らは一万三千の部落を率いて帰順した。その後、また征西将軍の高涼王那らを派遣して吐谷渾を白蘭で討ったので、慕利延はとうとう于闐（ホータン）に逃げこみ、于闐の王を殺し、死者は数万人に及んだ。慕利延はさらに南のかた罽賓（カピシ・ガンダーラ）に遠征した。慕利延は劉義隆に使者を派遣して援軍を求め、烏丸の帽子、女国の黄金酒器、胡王の黄金の釧（腕輪）などを献上し、劉義隆は慕利延に牽車を授けた。（太平真君）七年（四四六）、慕利延は旧領に帰還した。

慕利延が亡くなると、樹洛干の息子の拾寅が即位し、初めて伏羅川に町をつくった（四五二年、『資治通鑑』巻一二

六、元嘉二九年）。その居城の出入は、王者に似せていた。拾寅は北魏王朝に朝貢を行ない、朝廷から正朔（暦）を受けることを願い出た。その一方、宋朝の劉義隆からも爵位を受け、河南王と号した。太武帝は使者を派遣して拾寅を鎮西大将軍、沙州刺史に任命し、西平王の称号を授けた。その後、拾寅は、自らその地が北魏から遠く険阻であることを頼んで北魏の命令をきかず、宋の劉彧（明帝）と通好し、宋朝に良馬と四角羊を献上し、劉彧から官号を与えられた。

高宗文成帝（四五二～四六五）の治世、定陽侯の曹安は上表文をたてまつり、拾寅はいま白蘭を保有し、金銀、牛、馬を多く所有しているので、もし拾寅を撃てば、確実に勝利を得ることができると進言した。

議者たちはみな次のように考えた。「先帝は拾寅兄弟の不和に怒り、晋王の伏羅、高涼王那を、再度、吐谷渾討伐に赴かせたが、勝利することはできなかった。拾寅は再び遠方に逃亡したが、わが軍勢もまた疲弊した。いま、拾寅は白蘭におり、国境の塞を侵略せず、人々の災いにもならず、国家にとって急を要する課題ではない。もし使者を派遣して拾寅をなだめ帰順させれば、きっと臣下になりたいと願い出るにちがいない。北魏は労せずして吐谷渾を平定できよう。王者が四荒（四方の蛮地）に対する時は、彼らを羈縻するだけである。どうして、その国を滅ぼし、その地を領有する必要があろうか。」

これにたいして曹安は言った。「臣は、むかし澆河に駐屯する将軍でした。澆河は吐谷渾に近く、吐谷渾の動静についてはよく知っております。もし軍勢を分けて吐谷渾の左右に出れば、拾寅はきっと逃走して南山を保ち、十日もしないうちに牛馬の食べる草がなくなり、人もまた食べるものがなくなるでしょう。吐谷渾の民はきっと混乱状態になります。そうすれば一挙に吐谷渾を平定できます。」文成帝は曹安の意見に従い、詔を下して、陽平王の新成、建安王の穆六頭らを南道から、南郡公の李恵、給事中の公孫拔と曹安を北道から各々出撃させて、吐谷渾を攻撃させた。拾寅は南山に逃走し、北魏の諸軍は黄河を渡って拾寅を追撃した。しかし、この時、北魏の陣営には病気が蔓延した。諸将は議

論した。「賊はすでに遠方に遁走し、北魏の士気はすでに高まった。いま疲弊した将兵を駆り立てて、得がたい功績を求めるのは、得策ではない。」多くのものがこの意見に同調し、諸将は撤退して、駝馬二十餘万を獲得した。顕祖献文帝（四六五～七一）は、また上黨王の長孫観らに勅書を下し、州郡の兵士を率いさせて拾寅を討伐させた。軍勢が曼頭山に至ると、拾寅がやって来て迎撃し、長孫観らは兵士を放ってこれを打ち破った。拾寅は夜闇に紛れて遁走した。この結果、拾寅は後悔し、また（北魏の）藩臣に戻りたいと考えて、別駕の康盤龍を派遣して上表文をたてまつり朝貢してきた。しかし献文帝はこれを幽閉し、使者を返さなかった。拾寅の部落は大飢饉に襲われ、しばしば澆河を襲撃した。そこで献文帝は、平西将軍、広川公の皮歓喜に勅書を下し、敦煌、枹罕、高平の諸軍を先鋒となし、司空、上黨王の長孫観を大都督となして、拾寅を討伐させた。長孫観らの軍勢は拾寅の領土に入り、作物を刈り取ったので、拾寅は苦しみ恐れ、息子を派遣して北魏の陣地に赴かせ、上表して過ちを悔い改めたいと申し出た。長孫観らはこの事を献文帝に申し上げたので、献文帝は将兵をよくねぎらい、勅書を下して拾寅を厳しく責め、息子を入侍させるよう求めた。拾寅が息子の斤を入侍させたので、献文帝は間もなく斤を吐谷渾に帰還させた。拾寅はその後ふたたび辺境の民を襲撃し、将軍の良利に洮陽と枹罕の領地を守備させたので、枹罕鎮将、西郡公の楊鐘葵は、拾寅に書簡を送って責めた。拾寅は上表し、「詔勅をいただき、臣は旧土に帰還することを許されました。それゆえ良利を派遣して洮陽を守らせたのです。もし昔通りの恩寵が受けられないのなら、洮陽に命じて、その土地の物産を献上させてください」と言った。上表文の言葉は懇切であったので、献文帝はこれを許可した。これより拾寅は毎年朝貢するようになった。

太和五年（四八一）、拾寅が死没し、息子の度易侯が即位した（『資治通鑑』巻一三五、建元三年九月条）。度易侯は、侍郎の時真を派遣して特産物を北魏に貢納し、上表文を提出して王位を継承したことを告げた。その後、度易侯は宕昌を討伐した。孝文帝は勅書を下し、このことについて度易侯を責めるとともに、錦綵百二十匹を下賜し、度易侯を諭し

て悔い改めさせ、また略奪した宕昌の人民、家畜、財産を適宜返還させるようにした。度易侯はすべて孝文帝の勅書通りに実行した。

度易侯が死没すると、息子の伏連籌が即位した（四九〇年、『資治通鑑』巻一三七、永明八年八月条[1]）。高祖孝文帝は、伏連籌を入朝させたいと考えたが、伏連籌は上表して病気であると称し、その一方で、素早く洮陽、泥和城を占拠し、同地に守備隊を設置した。文明太后が崩御すると（四九〇年九月）、孝文帝は使者を派遣してその崩御を伏連籌に告げた。しかし伏連籌の拝命が無礼だったので、役人は吐谷渾を討伐するよう請願したが、孝文帝は許可しなかった。群臣は、伏連籌の勅書拝受の態度が無礼であったゆえ、吐谷渾の献上物は受納すべきでないと言った。孝文帝はこれに対し、「拝受の仕方が無礼であった時には、問責を加えるべきであって、その土地の収穫物（土毛）を献上することは、臣下が守るべき道である。献上品を閉ざして放棄し、諸国からの朝貢を遮断したら、たとえ、かれらが後に悔い改めても、その道を閉ざすことになる。」と言い、伏連籌に勅書を下して言った。「朕は（文明太后の喪に服しており）哀悼の最中であるため、征伐を控えている。しかし昨年の春、枹罕（の鎮将長孫百年）が上表し、洮陽と泥和にある吐谷渾の二つの守備隊を奪取したいと言ってきた。この時、これが辺境の将軍の常であるため、朕はすぐに許可した（『魏書』巻七、高祖紀・太和十五年）。北魏が討伐すると、二つの守備隊は北魏軍の評判を聞いて降伏を請願した。北魏は二千餘人を捕虜となし、婦女九百人を捕らえた。しかし女子供は、すべて吐谷渾に返還しよう。」伏連籌が、すぐに世継ぎの賀魯頭を派遣して京師（洛陽）に朝貢させたので、孝文帝は礼錫を増やし、伏連籌に使持節、都督西垂諸軍事、征西将軍、領護西戎中郎将、西海郡開国公、吐谷渾王を拝し、麾旗章綬の飾りをすべて伏連籌に与えた。

その後、孝文帝は、兼員外散騎常侍の張礼を伏連籌のもとに派遣した。伏連籌は張礼に対し、「かつては吐谷渾が宕昌と友好関係にあり、私はいつも大王と呼ばれ、かれは自分の名をなのっていた。いま突然、僕（しもべ）と名のり、

私の使者を拘束した。私は一軍を出動させて、その真意を問おうとおもう。」と言った。すると張礼は言い返した。「あなたと宕昌は、ともに北魏の藩屏です。この頃、あなたは軽々に軍隊を出動させるが、それは臣下としての礼節に背く行為です。私が出発する日、宰相は、『もし吐谷渾が迷いを断って罪を自覚するのであれば、藩屏としての仕事を保たせてやるが、愚なままに悔い改めないなら、災いと困難が吐谷渾に降りかかるだろう』と言っておりました。」これを聞くと、伏連籌は黙り込んだ（四九二年、『資治通鑑』巻一三七、永明十年五～七月条）。孝文帝が崩御すると、伏連籌は遣使して哀悼の意を表明し、北魏に対して誠実さと敬意を尽くした。

伏連籌は、内では北魏に対する朝貢を修め、外では夷狄を併合し、塞外の諸民族の中では精強、富裕と号した。中国王朝の真似をして官僚や役所を設け、皇帝に代わって諸国に対する政務をとり、自ら誇大に喧伝した。

世宗宣武帝は初め、勅書を下して伏連籌を責めて言った。「梁州部署は上表して、そなたが宕昌に与えた書を送ってきた。宕昌の梁彌邕とそなたは、ともに辺境の属国である。その国を語る時には、ともに隣藩といい、その国を論じる時には同列に扱う。だが、そなたは書を称して表となし、報を名づけて表となしている。役人は、国には常刑があるのだから、慇懃に討伐するよう朕に勧めている。朕は吐谷渾の地が険阻で遠隔であり、お互いが軽率に戦闘を構える事態をおもんばかる。だから、先に朕の意図をそなたに宣告する。そなたは自分でよくよく考えてみるがよい。」　すると、伏連籌は上表して自ら申し出た。その言葉はまことに懇切であった。伏連籌は宣武帝の一代、および正光年間（五二〇～二五）に至るまで、犛牛、蜀馬、西南の珍品を献上し、朝貢しない年はなかった。

その後、秦州（天水県）城人の莫折念生が反乱を起こし、河西路が遮断された[2]。涼州の城人萬于菩提らは東方の莫折念生に呼応し、涼州刺史の宋頴を捕えた。宋頴はひそかに使者を送って伏連籌に救援を求めた。伏連籌は自ら大衆を率いてこれを救い、ついに涼州を保全した（五二五年、『魏書』巻九、粛宗紀、正光五年九月条：『資治通鑑』巻一五〇、

普通六年十月条）。これ以後、国境の関所は不通となり、朝貢路は遮断された。

（以下『周書』吐谷渾伝と同じ）伏連籌が亡くなると、息子の夸呂が即位し、初めて可汗を自称した（五四〇年、『資治通鑑』巻一五八、大同六年十一月条）。治所は伏俟城で、青海の西十五里の場所にあった。城郭はあったが、そこには住まず、常にテントで生活し、水や草を追い求めて牧畜を行った。その地は東西が三千里、南北が千餘里であった。官職には、王公、僕射、尚書、それに、郎将、将軍の号があった。夸呂はひと束ねにしたまげを結い、毛飾りと珠を髪に飾り、黒絹の帽子をかぶり、黄金の師子（ライオン）の座に坐っていた。彼の妻は恪尊と号し、織り成した裙（パンタロン）を着用し、大きな錦の袍を着て、辮髪を後ろにたらし、頭に金の花冠を飾っていた。その風俗では、男性の衣服は中国とほぼ同じで、多くは羃離（べきら）を冠にしていた。また、絹の帽子をかぶっていた。女性はみな珠貝で髪を束ね、その珠が多いものほど身分が高かった。武器には弓・刀・鎧・矛があった。その国には常税がなく、必要があれば富豪や商人に課税して賄っていた。刑罰は、人を殺したものと馬を盗んだものは死刑、それ以外の罪を犯したものに対しては物で贖罪させ、罪の程度を考えて杖刑に処した。人に刑を科す時には必ず絨毯で頭をすっぽりつつみ、高い所から石を投げて罪人を撃ち殺した。父親や兄が亡くなると、父の後妻や兄嫁達を妻としたが、それは突厥の風俗と同じであった。婚姻の方法は、貧しくて財物を蓄えられないものは、女性を盗んで逃げた。死者はまたみな遺体を埋葬する。葬制では、葬儀が終わると服喪の期間も終わった。その国の人々の性格は欲深く、平気で人を殺害した。弓矢で狩猟することを好み、肉や乳製品を食糧とした。また農耕も行い、大麦、粟、豆があった。その国の北の境界は気候が寒い時が多く、ただ、カブラと大麦だけが取れた。そのため、吐谷渾では貧しいものが多く、豊かなものは少なかった。青海の周囲は千餘里で、湖の中に小さな山があった。毎年の冬、湖が凍った後、雌の良馬をこの小山の上に置き、翌年の春にこの雌馬を収めると、馬はみな子を孕んでおり、子を産むので駒を得ることができる。この駒を龍種と号した。

龍種は、その多くが駿馬であった。吐谷渾は、かつて波斯（ペルシア）の草馬を得て青海に放ち、それですぐれた駒を産ませた。この駒は一日によく千里を走り、世間では「青海驄」として知られている。その地は犛牛（ヤク）、馬を産し、鳥は鸚鵡が多かった。饒銅、鉄、朱沙を産出した。その地は鄯善（ミーラン付近）、且末（チェルチェン）も兼併した。

（以下は東魏・北斉史料）東魏の興和年間中（五三九～五四二）、斉の献武王（高歓）が宰相となり、遠方の国々を招きなつかせようとした。蠕蠕（柔然）はすでに北魏（東魏）に帰順した。夸呂は（東魏に）使者を派遣して、敬意を表した。献武王は大義を説いて諭し、朝貢を促した。そこで、夸呂は使者の趙吐骨真を派遣し、柔然を経由して、頻繁に朝貢した（五四〇年、『資治通鑑』巻一五八、興和二年）。また夸呂の従妹を推薦し、孝静帝は入内させて嬪となした（五四五年、『魏書』巻十二、孝静帝紀、武定三年：『資治通鑑』巻一五九、大同十一年正月条）。員外散騎常侍の傅靈檜を吐谷渾に派遣した。夸呂がまた東魏に婚姻を請願したので、済南王匡の孫娘を広楽公主となして夸呂の妻とした。この後、東魏への朝貢は絶えなかった。

注

（1）『魏書』本伝、それを採用した『資治通鑑』巻一三七、永明八年（四九〇）条は、吐谷渾王の度易侯が死亡して息子の伏連籌が即位したと記述するが、『南斉書』および『梁書』は息子の休留茂〔代〕が王位を継承したとする。さらに『梁書』巻二、武帝紀、天監三年（五〇四）九月条には「以河南王世子伏連籌為鎮西将軍、西秦河二州刺史、河南王」とあるので、王位継承は度易侯（四八一～四九〇）―休留茂〔代〕（四九〇～五〇四）―伏連籌（五〇四～五二九）と北朝系の史料を修正しなければならない。北朝系の史料が情報不足で吐谷渾王の系図に誤りが生じている例は伏連籌のあと、夸呂までに三王を脱落させていることが挙げられる。これについてはすでに小谷・菅沼（二〇一二：九一）『周書』異域

伝（下）の訳注、吐谷渾伝（注2）に述べた。

（2）正光五年（五二四）から北魏辺境を守備する六鎮が連鎖的に反乱をおこし、西方においても氐羌族を中心とした反乱がそれに呼応した。莫折念生（秦州）、萬于菩提（涼州）らの反乱がそれである。吐谷渾は軍隊を出動させて北魏政権を援護する立場をとった。この乱につづく爾朱栄の乱によって北魏王朝は分裂に至る。北魏末の諸反乱の意義については、谷川道雄『隋唐帝国形成史論』筑摩書房一九七一年、一七八～一八八頁を参照されたい。

高昌（トルファン）

高昌は、車師前王国の故地であり、漢の車師前部の地である。東西が二千里、南北が五百里の広さで、四方に大きな山が多かった。ある人は、むかし漢の武帝が軍勢を派遣して征西を行った時、軍隊がその途上で疲弊し、最も困窮したものが、高昌の地に留まり住んだと言う。その地勢は、土地が高く平らかで、庶民は盛んだったため「高昌」と言った。また、その地に漢の時の高昌壘があったので、これを国号としたとも言う。東は長安を去ること四千九百里で、漢の時代の西域長史、戊己校尉が、ともにこの地にあった。晋は、この地を高昌郡となし、張軌（前涼）、呂光（後涼）、沮渠蒙遜（北涼）が河西に拠ると、みな太守を置いて高昌を統治した。敦煌を去ること十三日の行程である。国には八つの城があり、みな中国人が住んでいる。この地は石磧（礫石砂漠）が多い。気候は温暖で、土地は肥沃である。穀物と麦が一年に二度みのり、養蚕をよくする。五果が多く、また漆が豊富である。草があり、羊刺という名で、その上に蜜が生じ、味は非常に美味しい。水を引いて田を灌漑する。赤塩を産し、その味はとても美味しい。また白塩もあり、その形は玉のようである。高昌人は、これを取って枕とし、これを中国に献上する。ブドウ酒を多く生産する。この国の風俗は天神に仕え、仏教も信仰する。この国のヒツジとウマは、隠れた場所で放牧され、外敵の襲撃を避けた。その場所

は貴人しか知らない。高昌の北には赤石山があり、七十里のところには貪汗山（ボグド・オラ）がある。夏でも積雪があり、この山の北が鉄勒（テュルク）との境界である。

太武帝（世祖）のとき、闕爽というものがおり、自ら高昌太守となった。太延年間中（四三五～四三九）に、散騎侍郎の王恩生らを高昌に派遣したが、柔然（蠕蠕）に捕えられた。太平真君年間中（四四〇～四五一）に、闕爽は沮渠無諱に襲われ、無諱は高昌を奪ってここに住んだ。無諱が死ぬと、弟の安周が代わって即位したが、和平元年（四六〇）、柔然（蠕蠕）に併合された。柔然は闕伯周を高昌王となした。高昌の君主が王を称するのは、このときから始まった。太和年間（四七七～四九九）の初め、伯周が死ぬと息子の義成が即位したが、数年たつと、兄の首帰に殺された。首帰は自ら即位して高昌王になった。

太和五年（四八一）、高車（テュルク）王の可至羅（『隋書』高昌伝、阿伏至羅）が首帰の兄弟を殺し、敦煌の人、張孟明を王にした。その後、張孟明は国人に殺された。高昌人は馬儒を擁立して王となし、鞏顧礼と麴嘉を左右の長史となした。太和二十一年（四九七）、馬儒は司馬の王体玄を派遣し、孝文帝に表を奉って朝貢し、軍隊を派遣して迎えてくれるよう請願して、国をあげて中国に移住したいと求めた。孝文帝（高祖）はこれを受諾し、明威将軍の韓安保に騎兵千餘を率いさせて高昌に派遣し、伊吾（ハミ）の五百里を割譲して、馬儒をここに住まわせようとした。韓安保が羊榛水に至ると、馬儒は鞏顧礼と麴嘉に歩兵と騎兵千五百を率いさせて韓安保を迎えさせ、高昌から四百里去ったところで鞏顧礼らが待っていたが、韓安保は来なかった。鞏顧礼らは高昌に帰還し、韓安保も伊吾に帰った。韓安保は、韓興安ら十二人を高昌に派遣し、馬儒もまた鞏顧礼に世継ぎの義舒を率いさせて韓安保を迎に行かせた。しかし、白棘城に至り、高昌を去ること百六十里の場所まで来ると、高昌の民の気持ちは故郷を恋い慕って、東への移動を願わなかった。彼らはともに馬儒を殺害すると、麴嘉を擁立して王となした（『資治通鑑』巻一四一・建武四年（四九七年））。《ここま

では『隋書』『周書』の高昌伝に採用された、と思われる》

麴嘉は、字を霊鳳といい、金城楡中（甘粛省蘭州）の人であった。即位すると、また柔然（蠕蠕）の那蓋に臣従した。鞏顧礼と義舒は韓安保に従って洛陽に行った。柔然（蠕蠕）可汗の伏図（五〇六～五〇八年）が高車（テュルク）に殺されたので、麴嘉もまた高車に臣従した。初め前部（車師前部）の胡人はことごとく高車のために強制移住させられて焉耆（カラシャール）に入植したが、焉耆もまた嚈噠（エフタル）に滅ぼされたため、国人は分散し、人々は自立することができず、麴嘉に王になるべき人を派遣して欲しいと請願した。そこで麴嘉は第二子を焉耆王となし、焉耆を統治させた。永平元年（五〇八）、麴嘉は、兄の息子で私署左衛将軍、田地太守の孝亮を京師に朝貢させ、北魏に対し、中国内地に移住することを求め、軍勢を派遣して、自分達を援助して迎えるよう請願した。そこで、北魏は龍驤将軍の孟威を派遣して涼州の兵三千を出動させて、これを迎えるために伊吾に至ったが、約束の時期に遅れ、帰還した（『魏書』巻四四孟威伝、『資治通鑑』巻一四七）。このあと十数回、遣使して玉像、白と黒の貂の皮衣、名馬、塩の枕などを献上し、まごころは十分に皇帝に伝えられたが、皇帝は、ただ心のこもった勅書を麴嘉に賜わっただけで、もう一度、軍勢を派遣して高昌人を迎えることはしなかった。永平三年（五一〇）、麴嘉は遣使して朝貢し、世宗（宣武帝）もまた孟威を派遣して勅書を与えて麴嘉をねぎらった。延昌年間中（五一二～五一五）、麴嘉を持節、平西将軍、瓜州刺史、泰臨縣開国伯となした。麴嘉が王を自称する事については、以前の通りであった（北魏は黙認した）。

熙平初め（五一六）、麴嘉は北魏に遣使して朝貢した。孝明帝は、麴嘉に勅書を下して言った。「そなたの国は関所や山をへだて、境界は荒漠とした土地に接し、中国からは遠方に位置しているが、頻繁に朝廷の支援を求め、国を移して中国内地へ移動したいと請願した。誠意を伝えてきてくれたことは喜ばしいが、その理由がまだ十分に定まっていないようだ。どうしてか。それはかの地の農民は漢・魏の遺民であり、晋の時代より中国王朝に統治されず、難儀に苦しみ、

居場所を失って他国にさすらっている。家庭を持ち、国家を立て、代々積み重なり、すでに久しい。何度も移住をくりかえすことを憎んでいる。人びとは故郷を懐かしみ恋い慕っているのに、いま、もしかれを強制移住させれば、異変が起きることを恐れる。ここと高昌は極めて近い距離のところにあり、上表のごとく内地に移住することは、必ずしも有利とはいえないのではないか。」

神亀元年（五一八）の冬、孝亮はまた上表して支援と内地への移動を求めたが、朝廷はこれを許可しなかった。正光元年（五二〇）、孝明帝（粛宗）は、仮員外将軍の趙義らを麴嘉のもとに派遣した。麴嘉の朝貢は絶えなかった。麴嘉はまた遣使して表を奉り、自分は辺境の遠地にいて中国の古典を習っていないので、五経、諸々の史書を借りたいと求め、さらに国子助教の劉變を博士となすよう請願した。孝明帝（粛宗）はこれを許した。

麴嘉が亡くなると、鎮西将軍、涼州刺史の官位を麴嘉に贈った。息子の堅が即位した。その後、関中では賊が反乱を起こし、朝貢はとうとう絶えた。普泰の初め（五三一）、麴堅は遣使して朝貢し、平西将軍、瓜州刺史、泰臨縣伯に任命された。王号は以前のとおりで、また衛将軍を加えられた。永熙年間中（五三二～五三四）になって、特別に儀同三司に任じられ、爵位は郡公に進んだ。その後、高昌と北魏との通好は、ついに隔絶した。

参考文献

伊藤敏雄二〇〇八：「楼蘭（鄯善）国都考」『西北出土文献研究』第六号。
内田吟風一九七〇、七一、七二：「魏書西域伝原文考釈」上・中・下、『東洋史研究』第二九巻第一号、第三〇巻第二・三号、第三一巻第三号。
内田吟風一九七一：「蠕蠕伝・芮芮伝訳注（魏書・宋書・南斉書・梁書）」『騎馬民族史1正史北狄伝』平凡社（東洋文庫）。
内田吟風一九八〇：内田吟風編『中国正史西域伝の訳註』京都。
榎一雄一九九二：「エフタル民族の起源」『榎一雄著作集』第一巻「中央アジア史1」汲古書院、一九九二年（初出は一九五一年『和田博士還暦記念東洋史論叢』講談社）。
榎一雄一九九四：「梁職貢図について」『榎一雄著作集』第七巻「中国史」汲古書院、一九九四年（初出は一九六三年『東方学』第二六輯）。
榎一雄一九九四：「滑国に関する梁職貢図の記事について」『榎一雄著作集』第七巻（初出は一九六四年『東方学』第二七輯）。
榎一雄一九九四：「描かれた倭人の使節―北京博物館蔵「職貢図巻」―」『榎一雄著作集』第七巻（初出は一九八五年『歴史と旅』第一二巻第一号）。
榎一雄一九九四：「梁職貢図の流伝について」『榎一雄著作集』第七巻（初出は一九六九年、鎌田博士還暦記念会編『鎌田博士還暦記念歴史学論叢』東京）。
小谷・菅沼二〇一〇：小谷仲男・菅沼愛語「『新唐書』西域伝訳注（一）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』第九号。
小谷・菅沼二〇一一：小谷仲男・菅沼愛語「『新唐書』西域伝訳注（二）」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学

編』第十号。
小谷・菅沼二〇一二：小谷仲男・菅沼愛語「『隋書』西域伝、『周書』異域伝（下）の訳注」『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要・史学編』第十一号。
佐藤長一九五八：『古代チベット史研究』上巻、東洋史研究会。
佐藤長一九七八：『チベット歴史地理研究』岩波書店。
嶋崎昌一九五九：「高昌国の城邑について」『中央大学文学部紀要・史学科』第一七巻（『隋唐時代の東トゥルキスタン研究』に再録）。
嶋崎昌一九七七：『隋唐時代の東トゥルキスタン研究—高昌国史研究を中心として』東京大学出版会。
谷川道雄一九七一：『隋唐帝国形成史論』筑摩書房（増補版は一九九八年）。
長沢和俊一九七一：『法顕伝・宋雲行記』平凡社（東洋文庫）。
前田正名一九六七：「四世紀の仇池国」『立正大学教養部紀要』創刊号。
松田寿男一九八七：「吐谷渾遣使考」『松田寿男著作集四・東西文化の交流二』六興出版。（初出は一九三七年『史学雑誌』第四八巻第十一号・十二号）。
和田博徳一九五一：「吐谷渾と南北両朝との関係について」『史学』第二五巻第二号。
張庚一七三九：「諸番職貢図巻」葛嗣**澎**撰『愛日吟廬書画続録』（『続修四庫全書』上海戸籍出版一九九五年、一〇八八子部・藝術類所収）。
李錦繡・余太山二〇〇九：『『通典』西域文献要注』上海人民出版社。
栄新江二〇〇七：「闕氏高昌王国与柔然、西域的関係」『歴史研究』二〇〇七年第二期。

趙燦鵬二〇一一：「南朝梁元帝《職貢図》題記佚文的新発見」『文史』二〇一一年第一輯。
周偉洲二〇〇六：『吐谷渾史』広西師範大学出版社。
余太山二〇〇五：『両漢魏晋南北朝正史西域伝要注』中華書局。
Enoki, Kazuo 1984：The Liang chih-kung-tu　梁職貢圖、*Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 42.
Molè, Gabriella 1970：*The T'u-yü-hun from the Northern Wei to the time of the five dynasties*, Roma.
Pelliot, Paul 1912：Les noms Tibétains des T'ou-yu-houen et des Ouigours.*Journal Asiatique*.
Pelliot, Paul 1921：Notes sur les T'ou-yu-houen et les Sou-pi, *T'oung Pao* XX.
Thomas, Carroll 1953：*Account of the Tu-yü-hun in the Chin Dynasty*, University of California Press.